

『イパーチイ年代記』 翻訳と注釈 (9)  
— 『キエフ年代記集成』 (1196 ~ 1199 年)

中 沢 敦 夫

富山大学人文学部紀要第 69 号抜刷

2018年8月

## 『イパーチイ年代記』 翻訳と注釈 (9) — 『キエフ年代記集成』 (1196 ~ 1199 年)

中 沢 敦 夫

6704 [1196] 年

リユーリク [J2] は、自分の家臣たちと評議して、自分の姻戚であるスーズダリ公のフセヴォロド [D177:K] に使者を派遣して、かれにこう言った。

「先にそなたは、キリスト降誕祭の頃<sup>1)</sup>に、わしとわしの兄弟のダヴィド [J3] とともに〔遠征のための〕馬に乗って、全員がチェルニゴフで落ち合おうと依頼してきた。そこで、わしは自分の兄弟たち、自分の従士団、原野のポロヴェツ人と集合し、われらは武装して馬に乗り、そなたからの知らせが来るのを待っていた。ところが、そなたは、かれら〔オレーゲー族〕がすべてについて服従するという〔約束〕を信じ込んで、この冬に馬に乗らなかった<sup>2)</sup>。わしは、そなたが〔遠征のための〕馬に乗らないということを知り、自分の兄弟たちと原野のポロヴェツ人を解散させた<sup>3)</sup>。そして、わしは、チェルニゴフ〔の公の〕ヤロスラフ [C412] と十字架接吻をして **[695]**、全員が和合して合意をするか、あるいは全員が合意できないかが決まるまでは、進攻を行わないことを誓った。兄弟よ、今ではわしの息子であり、そなたの〔息子でもある〕<sup>4)</sup>ムスチスラフ [J12] は捕まって、オレーゲー族のところで虜囚の身になっている<sup>5)</sup>。どうか、一日も早く馬に乗って、どの場所でもよいから会おうではないか。そして、自分が受けた屈辱と辱めを晴らし、自分自身の甥〔ムスチスラフ [J12]〕を解放し、自分の信義を回復しようではないか」。

---

1) 1195 年 12 月 25 日を指している。この使者派遣の時点から半年以上も前の出来事である。

2) 6703(1195) 年の記事には、オレーゲー族（おそらくヤロスラフ [C412]）がチェルニゴフの修道院の典院ディオニーシイをフセヴォロド [D177:K] のもとに派遣して服従を誓ったために、フセヴォロドは遠征を取りやめたことが記されている。[イパーチイ年代記 (8) : 注 485] を参照。

3) フセヴォロド [D177:K] のチェルニゴフへの遠征（対オレーゲー族）取りやめを受けて、リユーリク [J2] が同盟諸公の部隊を解散し、原野のポロヴェツ人を故郷へと引き返させたことについては、[イパーチイ年代記 (8) : 注 486] を参照。

4) ムスチスラフ・ロマノヴィチ [J12] はリユーリク [J2] にとっては甥であり、フセヴォロド [D177:K] にとっては娘婿（ロスチスラフ [J21]）の従兄弟にすぎず、ここの「息子」(сынъ) は親族関係をあらわすものではない。ここでは、親族序列における一世代下の公という意味で「息子」を使っているのだろう。

5) ムスチスラフ・ロマノヴィチ [J12] が、1196 年 3 月のヴィテブスク郊外の戦いでポロツク人の捕虜になったことについては [イパーチイ年代記 (8) : 274 頁] を参照。

しかし、フセヴォロド [D177:K] からは、ひと夏の間<sup>6)</sup> なんの連絡もなかった。

リューリク [J2] は、〔再度〕自分の兄弟たちと原野のポロヴェツ人と呼ばせて、オレーグ一族〔の諸公〕への侵略を始めた。それは、フセヴォロド [D177:K] が「そなたが〔戦いを〕始めるのなら、わしはそなたと〔行動をともにする〕用意がある」とかねてから言っていたからである。

チェルニゴフ〔公〕のヤロスラフ [C412] は、自分の使者をリューリク [J2] のもとに派遣し始めて、かれに言った。「兄弟よ、なぜそなたはわしの領地を侵略するのか、そなたは異教徒の手の財を満たしているのだ<sup>7)</sup>。わしとそなたを分かつものはなにもない。わしはそなたの支配下にあるキエフを要求しない。ダヴィド [J3] については、かれはムスチスラフ [J12] を、わしの二人の甥<sup>8)</sup> を討つために派遣したのであり〔それは別のことだ〕。もし、神がそう定めるのであれば、わしはムスチスラフ [J12] を、信愛にもとづき買い戻し金なしで引き渡そう。十字架接吻をして、わしとの同盟を〔誓え〕。わしをダヴィド [J3] と和解させよ。フセヴォロド [D177:K] については、もしかれがわれらと合意したいというのなら、合意させよ。そなたは、〔そなたの〕兄弟のダヴィド [J3] とともにある必要はないであろう」。

リューリク [J2] はかれ〔ヤロスラフ [C412]〕に〔答えて〕言った。「もしそなたがわしと、信義をもって信愛を結びたければ、わしにフセヴォロド [D177:K] **【696】** とダヴィド [J3] への使者を自由に派遣させよ。すべてのことが相談できるようになれば、そなたと話をまとめることもできるだろう」。リューリク [J2] はそのために、自分の使者を〔フセヴォロド [D177:K] とダヴィド [J3] のもとに〕派遣することを望んでおり、信実に〔ヤロスラフ [C412] と〕信愛を結ぼうと望んでいた。

しかしヤロスラフ [C412] は、リューリク [J2] の言葉を信用しようとせず、相手が自分に対して敵対を企てていると思っていた。そのために、リューリク [J2] の使者たちが自分の領地を通過することを許さなかった。オレーグ一族〔の諸公〕がすべての街道を掌握していたのである。

このようにして、〔リューリク [J2] とヤロスラフ [C412]〕はお互いへの掠奪を行い、夏の間ずっと、秋になるまで襲撃を繰り返していた<sup>9)</sup>。

6) 1196年の夏を指している。

7) リューリク [J2] が原野のポロヴェツ人と連合していることを指している。

8) オレーグ [G5] とその息子ダヴィド [G51] (1196年3月のヴィテプスク郊外の戦いで戦死) を指している。

9) リューリク [J2]、フセヴォロド [D177:K] 陣営とヤロスラフ [C412] との間の抗争についての記述は下注 30 の個所に続いている。

その年、オレーグ一族のひとりで、イーゴリ [C432] の兄弟にあたるフセヴォロド・スヴァトスラヴィチ<sup>10)</sup>[C433] が逝去した。5月<sup>11)</sup>のことだった。オレーグ一族の一門<sup>12)</sup>の兄弟たちがみな、大いなる名誉を示して、またひどく泣き、号泣しながら、かれの遺体を布で巻いた。なぜなら、かれ〔フセヴォロド [C433]〕はオレーグ一族の中で誰よりも、生来も長じても勇猛であり、体躯が大きく、数々の善行、多くの軍功<sup>13)</sup>をなし、全ての人への愛を持っていたからである。

チェルニゴフ主教<sup>14)</sup>、すべての典院と司祭たちは通常の聖歌を唱いながらその遺体を棺のところまで送った。そして、チェルニゴフの聖母教会<sup>15)</sup>に安置した。かれ〔フセヴォロド [C433]〕は自分の父、自分の祖父の仲間に加えられ、生きとし生ける誰も免れることのできない万人に共通の負債を支払ったのだった<sup>16)</sup>。

その年の秋<sup>17)</sup>、リューリク [J2] の娘婿であるロマン・ムスチスラヴィチ [I11] は、リューリク [J2] およびダヴィド [J3] の領地を掠奪させるために、自分の家来たちを派遣した。【697】これは、オレーグ一族〔の諸公〕を助けるためであり、これについては自分の岳父〔リューリク [J2]〕に内密に、かれら〔オレーグ一族諸公に〕十字架接吻の誓いをしたのだった。

かれ〔ロマン [I11]〕は、それより以前に、自分の岳父のリューリク [J2] に対して十字架接吻をして、もはやオレーグ一族とは袂を分かつこと、かれ〔リューリク〕の意志に服従すること、かれ〔リューリク〕を模範とすることを誓っていた。

---

10) フセヴォロド [C433] は、トルーベチ (Трубеч) (現在のトルブチェフスク (Трубчевск)) の公だった。

11) 1196 年 5 月のこと。ウクライナ語訳の注記は「5 月 17 日」と日付を特定しているが、これはいわゆる「タティーシチェフ資料」にもとづくもので、信頼性には疑問がある。

なお、この記事は独立したチェルニゴフ資料を挿入したために、先行の記事から見ると、若干時系列が廻っている。

12) 「オレーグ一族の一門の」(во Ольговичехъ племени) と、「オレーグ一族」(Ольговичи) の呼称に「一門」(племя) の語が付されているが、これまで племя の語は「モノマフ一族」に対してもっぱら付されていた。ここでは、「オレーグ一族」に対する肯定的な評価を含意しているのだろう。

13) この「多くの軍功」(можъственою доблестью) は、フレーブニコフ写本では「善事と雄々しい軍功」(добродѣтелю и мужественною доблестию) となっている。

14) 当時のチェルニゴフ主教はポルフィーリイだった。[イパーチイ年代記(7):238 頁, 注 429] を参照。

15) 1186 年にスヴァトスラフ [C411:G] によって建立された、受胎告知教会のこと。[イパーチイ年代記(8):注 237] を参照。

16) 「生きとし…」以下の文言は、先行するスヴァトスラフ [J4]、ムスチスラフ [J5]、ロマン [J1] など「ロスチスラフ一族」諸公の死亡記事に共通する追悼辞（([イパーチイ年代記(7):255 頁, 注 527] 参照）と共通であり、本来はチェルニゴフ資料である本記事を、キエフ年代記集成の最終編集者が加筆編集した結果であろう。

17) 1196 年秋のこと。

リューリク [J2] は、かつてキエフ府主教ニキーフォルのとりなしによって、かれ〔ロマン [I11]〕への怒りを解いたことがあり、そのとき、〔ロマンの〕十字架接吻〔の誓い〕を信じて、かれ〔ロマン〕にポロニイを与えていた<sup>18)</sup>。ロマン [I11] は、そのポロニイに自分の家来たちを送り込んで<sup>19)</sup>、そこから侵略のために出動するよう命じたのである。

リューリク [J2] は、ポロニイから出動した者どもが、かれの兄弟のダヴィド [J3] やかれの息子のロスチスラフ [J21] の領地を掠奪しているとの〔報告を〕聞いた<sup>20)</sup>。そのため、かれ〔リューリク〕は、自分の娘婿〔ロマン [I11]〕を討伐すべく自ら出撃しようと考えた<sup>21)</sup>。

かれ〔リューリク〕はまた、自分の甥ムスチスラフ<sup>22)</sup> [J51] を、ガーリチのウラジーミル [A12111] のもとに派遣して、かれにこう言った。

「わしの婿〔ロマン [I11]〕が約定を破って、わしの領地を掠奪している。兄弟よ、そなたはこれから、わしの甥〔ムスチスラフ [J51]〕とともに、かれ〔ロマン [I11]〕の領地に掠奪を仕掛けてほしい。わし自身は、ヴラジミル〔=ヴォルィンスキイ〕への進軍を予定していた<sup>23)</sup>が、わしのもとに報告がもたらされた。それによると、わしの姻戚のフセヴォロド [D177:K] が、オレーグ一族の討伐に援軍を出すというわしへの約束を守って、馬に乗って〔進軍を始め〕、今はチェルニゴフの近くに陣を張っているという。また他にも、わしのために、〔フセヴォロ

18) 1195年にリューリク [J2] は、府主教ニキーフォルのとりなしをうけて、ロマン [I11] に十字架接吻による忠誠の誓いをさせて、ポロニイの城市を与えている。〔イバーチイ年代記 (8):注 482, 483〕を参照。

19) このときロマン [I11] は拠点城市であるヴラジミル=ヴォルィンスキイにいたと考えられる。ロマンはヴォルィニの主力部隊を、キエフ地方との境界に位置するポロニイに派遣して、そこから、キエフ地方の主要城市への掠奪遠征を準備したのである。

20) 当時ロスチスラフ [J21] はトルチェスクを拠点城市とした支配公で、ロシ川流域の黒頭巾族に支配を及ぼしていた。それゆえ、ロマン [I11] は自分の家来からなる部隊を、ポロニイからロシ川上流域に派遣して掠奪をさせたと考えられる。

21) この部分と同様の内容が『ラヴレンチイ年代記』6705(1197)年の項に次のように記されている「ロマンコ [I11] が〔自分の妻である〕リューリクの娘を離縁しようとし始め、かの女を剃髪させようとした。リューリク [J2] は大いなる公フセヴォロドに使者を遣って言った。『兄弟にして姻戚よ。ロマンコはわれらから離反して、オレーグ一族に十字架接吻の〔忠誠の誓い〕をした。兄弟にして姻戚よ。十字架接吻文書を返送して、それ〔誓い〕を破棄せよ。そして、そなた自身は乗馬して〔オレーグ一族討伐の遠征〕に出られよ!』〔ПСРЛ Т. 1, 1997: Стб. 412-413〕。

22) リューリク [J2] には甥(сыновец)の「ムスチスラフ」は二人いるが、兄ロマン [J1] の息子であるムスチスラフ・ロマノヴィチ [J12] はこの時点ではチェルニゴフに囚われていることから、これは、弟ムスチスラフ [J5] の息子であるムスチスラフ・ムスチスラヴィチ [J51] (のちに「剛胆公」(Удалой) と称される) を指していると考えられる。

23) ロマン [I11] が支配するヴォルィニ公領の周辺城市に掠奪を仕掛けることによって敵の軍勢を引きつけ、守りが手薄になったところで、リューリク [J2] 自身が拠点城市であるヴラジミル=ヴォルィンスキイを襲撃、占拠しようという作戦を立てていたということ。

ド [D177:K] は] わしの兄弟のダヴィド [J3] と合流して、かれら [オレーグー族諸公] の領地に火をかけ、ヴァティチの地<sup>24)</sup> の諸城市を占拠し、炎上させているという。【698】 わしは、今まさに武装して馬に乗り、かれら [フセヴォロドとダヴィド] から適切な連絡を待っているのだ<sup>25)</sup>」。

ウラジーミル [A12111] は、ムスチスラフ [J51] とともに進軍して、ペレミリイ<sup>26)</sup> (Перемиль) 周辺のロマン [I11] の領地を掠奪して火をかけた。他方、ロスチスラフ・リューリコヴィチ<sup>27)</sup> [J21] は、ウラジーミル [A12111] の子供たち<sup>28)</sup>、黒頭巾族を引き連れて、カメネツ<sup>29)</sup> (Каменец) 周辺のロマン [I11] の領地を掠奪して火をかけた。こうして、奴隷や家畜を獲得し、報復を行って、帰郷した。

さて、われらは前の記述に戻ろう<sup>30)</sup>。

その年の秋<sup>31)</sup>、チェルニゴフ [公] のヤロスラフ・フセヴォロドヴィチ [C412] は報を聞いた。フセヴォロド [D177:K] とダヴィド [J3] がかれら [オレーグー族諸公] の土地に侵入して<sup>32)</sup>、かれらの領地を焼き、ヴァティチの諸城市<sup>33)</sup> を占領して、これに火をかけているという。

---

24) ヴァティチの地は歴史的にチェルニゴフ公領に含まれる支配地だった。

25) リューリク [J2] は、チェルニゴフ地方を攻撃しているフセヴォロド＝ダヴィド陣営から連絡があり次第、チェルニゴフ攻撃に合流しなければならないので、ウラジミル＝ヴォルィンスキイへ自分自身が遠征することはできないと言っているのである。

26) 「ペレミリイ」(Перемиль) はヴォルィニ地方のストイリ川 (Стырь) 上流河岸の城市で現在のペレミリ (Перемиль) 市に相当する。ヴォルィニのウラジミルからなら南西方向に 78km ほどしか離れていない。

27) ロスチスラフ [J21] は、拠点城市トルチェスクから出撃したと考えられる。

28) 当時ウラジーミル [A12111] の息子には、ヴァシリコ [A12111] とウラジーミル＝イワン [A12112] がいたと考えられる。

29) この「カメネツ」(Каменец) は、ウクライナ語訳のマフノヴェツの索引によれば、西ブク川右岸支流のレスナ川 (Лесна) 沿岸にあった、現在のベラルーシのカメネツ (Камянец) に同定している。これは、現在のプレスト北方 35km ほどに位置しており、かりにガーリチからだと直線で約 370km の長途の遠征になり、非現実的である。この「カメネツ」は、現在のカメネツ＝ポドリスキイ (Камянец-Подільський) に同定するか、もしくは、ガーリチから北西へ 50km 程の、ヴォルィニ地方との境界地域にある、ドニエストル川沿岸の現在のカミヤネ (Кам'яне) 村に同定したほうがより現実的と思われる。

30) 以下の記述は、上注 9 の場所から続くということ。

31) 1196 年の秋。チェルニゴフの資料を使っているため、年紀が繰り返されている。

32) この、フセヴォロド [D177:K] によるチェルニゴフ進攻についての記述は、『ノヴゴロド第一年代記』 6704(1196)年の項にもあり「フセヴォロド [D177:K] は自ら部隊を集め、ポロヴェツ人部隊を伴って、チェルニゴフを攻めた」([НПЛ: С. 43, 236][ノヴゴロド第一年代記 XV: 27 頁]) と記されている。

33) 上注 24 の記述と同じ事態、すなわちフセヴォロド [D177:K] とダヴィド [J3] によるヴァティチ進攻についての記述が、ここでも繰り返されている。

ヤロスラフ [C412] は自分の兄弟たちを糾合すると、かれらと評議して、自分の土地が〔侵略されていることを〕残念に思った。そして、スヴァトスラフ [C411:G] の二人の息子オレーグ [G5] とグレーブ [G3] をチェルニゴフに籠城させ、他の〔諸公にも〕それぞれの城市に立て籠もって、リューリク [J2] 〔の攻撃〕から〔城市を〕守るよう命じた。

そして、かれ〔ヤロスラフ〕自身は、フセヴォロド [D177:K] とダヴィド [J3] に対抗するために出陣した。自分の兄弟たち、自分の〔二人の〕甥たち<sup>34)</sup>、原野のポロヴェツ人<sup>35)</sup> も集合させた。そして、自領地の森の近くに陣を張ると、木を伐採して鹿砦をつくり、フセヴォロド [D177:K] とダヴィド [J3] からの守りとした。また、川々の橋を伐り落とすよう命じた。

こうしてから、〔ヤロスラフ [C412] は〕フセヴォロド [D177:K] とダヴィド [J3] に対して、ひとりの自分の家臣を派遣して、かれ〔フセヴォロド〕にこう言った。「兄弟にして姻戚<sup>36)</sup>よ、そなたはわれらの父の地とわれらの穀物を掠奪している。もし、そなたが、われらと正義の約定を結び、われらと親愛をもって【699】共存することを欲するなら、われらも親愛〔講和〕を避けることはしない、そなたの意志に従ってもよい。そなたが、悪事を企んでいるなら、われらは〔悪事に対抗して戦うことを〕避けることもしない。神と聖なる救世主がわれらに裁きを下すだろう<sup>37)</sup>」。

フセヴォロド [D177:K] は、ダヴィド [J3] とリャザンの諸公<sup>38)</sup>、自分の家臣たちと協議をし始めた。親愛を欲する場合、かれら〔オレーグ一族諸公〕とどのように和解するのがよいか〔について相談した〕。

ダヴィド [J3] はここで和を結ぶことを望んでおらず、かれ〔フセヴォロド [D177:K]〕をチェ

34) 上記のオレーグ [G5] とグレーブ [G3] を指している可能性が高いが、特定はできない。

35) リューリク [J2] がヤロスラフ [J412] 討伐の戦いのために「原野のポロヴェツ人」を召集しているが〔イバーチ年代記 (8) : 注 486 参照〕、ヤロスラフ [J412] 側も同様にポロヴェツ人を集めていたことがわかる。これは、リューリク [J2] に従っていたポロヴェツ人が寝返ったものか、全く別の集団だったのかははっきりしない。

36) 『ラヴレンチイ年代記』6695(1187)年の記事によると、1187年7月11日にフセヴォロド [D177:K] は「自分の娘フセスラヴァ (Всеслава) をチェルニゴフのロスチスラフ・ヤロスラヴィチ [C412] に」嫁がせている〔ПСРЛ Т. 1, 1997: Стб.405〕。つまり、ヤロスラフ [C412] にとってフセヴォロド [D177:K] は嫁の父親であり、「姻戚」(сват)であった。

37) チェルニゴフの首座教会は「聖なる救世主」(святыи Спась) に奉献された救世主教会であり、ヤロスラフ [C412] の言葉は、自分の城市の「守護聖人」による裁き(神判)、すなわち戦闘による決着も辞さないということの意味している。

38) 当時のリャザン公はグレーブ・ウラジーミロヴィチ [H41] を指すと考えられる。かれは、スモレンスク公ダヴィド [J3] の娘と結婚しており、その関係でダヴィドの援軍に参加していたのだろう。

ルニゴフへ向けて進攻させようとした。かれ〔ダヴィド〕はかれ〔フセヴォロド〕にこう言った。「そなた〔フセヴォロドフ〕は、かつて自分〔わし〕の兄弟のリューリク [J2] 及びわしと合意していたではないか。全員がチェルニゴフの近くに集合するということを。われらは、全員がみな自分の意にかなった〔条件で〕和を結ぶべきなのだ<sup>39)</sup>。ところが、今そなたは、自分の兄弟のリューリク [J2] に家臣を派遣することもせず、自分の〔チェルニゴフ地方への〕到来についても、わしの〔到来についても〕、かれ〔リューリク〕に知らせていない。そなたは、自分の家臣を通じて〔派遣して〕かれ〔リューリク [J2]〕と合意せよ。かれ〔リューリク [J2]〕は春になる前<sup>40)</sup>に〔すでに〕武装して馬に乗って〔チェルニゴフへ遠征し〕、オレーグ一族と戦う準備をしており、そなた〔フセヴォロド〕から適切な知らせを待っていたのだ<sup>41)</sup>。ところが、今ではかれ〔リューリク [J2]〕はかれら〔オレーグ一族諸公〕と戦っており、そなた〔フセヴォロド [D177:K]〕のために、自分の領地が焼かれている<sup>42)</sup>。今、そなたは<sup>43)</sup>、かれ〔リューリク [J2]〕との協議を抜きにして和を結ぼうとしている。兄弟よ、わしはそなたに伝えよう。わしの〔兄弟の〕リューリク [J2] はここで、和を結ぶことに同意してはいないことを」。

フセヴォロド [D177:K] は、ダヴィド [J3] やリャザン諸公の考え方に同意していなかった。そこでかれ〔フセヴォロド〕はオレーグ一族〔の諸公〕に使者を遣り始め、かれらと約定を結び、かれらが自分の姻戚である、ムスチスラフ・ロマノヴィチ [J12] 〔の身柄を解放するよう〕要請した。また、かれら〔オレーグ一族諸公〕に対して、ヤロボルク [D1712] をその地から追放【700】すること<sup>44)</sup>、ロマン・ムスチスラヴィチ [I11] と袂を分かつことを命じた。

---

39) ここで「全員」が強調されているのは、リューリク [J2] を含めて、自分たち全員で和を講ずるべきだということ。

40) 1196 年の春以前にということ。

41) このリューリク [J2] の状態については、上注 25 を参照。

42) 上注 9 にあるような、リューリク [J2] とヤロスラフ [C412] の間のお互いへの襲撃の事態を指している。

43) イパーチイ写本では、「われらは~しようとしている (хочемъ)」となっているが、フレーブニコフ写本では、動詞が「そなたが~しようとしている (хочешь)」となっており、文脈からみて和を結ぼうとしているのはフセヴォロド [D177:K] のみであることから、後者の読みを採用した。

44) ヤロボルク [D1712] は 1178 年にフセヴォロド [D177:K] によってノヴゴロドの公座を追われると、スヴァトスラフ [C411:G] の庇護を求めてチェルニゴフに亡命し、1181 年にはスヴァトスラフ [C411:G] のフセヴォロド [D177:K] 討伐遠征にも参加している ([イパーチイ年代記(7): 259 頁, 注 530] を参照)。ヤロボルク [D1712] はこれ以降この年 (1196 年) まで、チェルニゴフ公であるスヴァトスラフ [C411:G]、およびヤロスラフ [C412] の庇護を受けてきたのだろう。ここでは、フセヴォロド [D177:K] は長年の仇敵であるヤロボルク [D1712] のチェルニゴフからの追放を、ヤロスラフ [C412] との和議の条件に持ちだしたのである。

ヤロスラフ [C412] はロマン [I11] と袂を分かつことについては乗り気ではなかった。なぜなら、かれ〔ロマン [I11]〕は自分の岳父であるリューリク [J2] に敵対することによって〔自分(ヤロスラフ)を〕を助けていたのだから。しかし、〔ヤロスラフ [C412]〕は、ムスチスラフ [J12] 〔の身柄〕をかれ〔フセヴォロド [D177:K]〕に引き渡すことについては同意し、ヤロボルク [D1712] を自分の領地から追放することについても同意した。

フセヴォロド [D177:K] は、かれら〔オレーグ一族〕の〔この返答の〕言葉に同意した。かれ〔フセヴォロド [D177:K]〕は自分の家臣をヤロスラフ [C412] のもとに派遣して、かれ〔ヤロスラフ [C412]〕と自分の領地について、自分の子供たち〔の領地〕について取り決めた。〔ヤロスラフ [C412] が〕リューリク [J2] 支配下のキエフを要求しないこと、ダヴィド [J3] 支配下のスモレンスクを要求しないことを〔取り決めた〕。そして、ヤロスラフ [C412] に〔取り決めを守ることに〕十字架接吻〔の誓い〕をさせた。すべてのオレーグ一族〔諸公〕にも〔十字架接吻の誓いを〕させた。

ヤロスラフ [C412] もまた、自分の家臣を派遣して、フセヴォロド [D177:K] とダヴィド [J3] に〔取り決めを守ることに〕十字架〔接吻の誓い〕をさせた。リヤザンの諸公も自分たちの約定を行い、これを尊い十字架によって確認した。

〔このようにして、〕いとも福にして、いとも慈悲あるわれらが神キリストは、悪魔をも、原野のポロヴェツ人をも喜ばせようとはされなかった。もし、流血の事態になったら、〔かれら悪魔とポロヴェツ人は〕ルーシの諸公の諍いを喜んだに違いない。だが、神はキリスト教徒を、穢れて呪われたハガル人の手から解放し、尊い十字架によってそれを確認した。こうして、それぞれは、自分の故郷へと帰っていった。

こうして、フセヴォロド [D177:K] はヤロスラフ [C412] と和を結び、自分の家臣をリューリク [J2] のもとに派遣して、かれ〔リューリク〕にこう告げた。「わしはヤロスラフ [C412] と和を結んだ。かれ〔ヤロスラフ [C412]〕は、わし〔フセヴォロド [D177:K]〕に対する十字架接吻の〔誓約によって〕、かれがそなた〔リューリク〕の支配下のキエフを【701】求めないこと、またそなたの兄弟ダヴィド [J3] 支配下のスモレンスクを求めないことを〔誓った〕」。

しかし、リューリク [J2] は、フセヴォロド [D177:K] の話を聞いて、これに同意せず、かれに抗議をした。なぜなら、かれに約束したことは実行されていなかったからである<sup>45)</sup>。そして〔リューリク [J2]〕は、自分の家臣をフセヴォロド [D177:K] のもとに派遣してこう言った。

---

45) この約束については、下注 47 を参照。

「姻戚の者よ、そなたはわしに十字架接吻によって、わしにとっての敵はそなたにとっての敵である旨を誓い、わしに対してルーシの地の分け前を要求した。わしはそなたに、最良の領地を与えた。それは、わしがあり余る土地を持っていたからではない。わしはそなたのために、自分の兄弟や自分の娘婿ロマン [I11] からその土地を取り上げ〔て与えた〕 たのだ<sup>46)</sup>。今、かれ〔ロマン [I11]〕 はわしにとっての敵になっている。それは他でもないそなたのせいである。そなたは、〔遠征のために〕 馬に乗ってわしを援助することを約束したが、そなたはこの夏も冬もやり過ぎた<sup>47)</sup>。そして、今になってやっと馬に乗ったが、いかにしてもわしを助けようがないではないか。

そなたは自分で〔勝手に〕 約定を結んでしまった。わしが戦争をしなければならない相手、すなわちわしの娘婿〔ロマン [I11]〕 について、そなたはヤロスラフ [C412] と約定を結んでしまった。わしがかれ〔ロマン〕 に与えた領地についても〔約定を結んでしまった〕。わしは、誰のために、馬に乗って〔遠征する〕 ようにそなたに要請したのか。わしはオレーグ一族の諸公から何とも大きな侮辱を受けたのだ。かれらはわしの支配下のキエフを要求はしないにしても、かれら〔オレーグ一族〕 がそなたに善をなさなかったからこそ、わしも、そなたのためにかれらに対して善をなさず、かれらと戦い、自らの領地を焼かれるようなことになったのだ。ところが、今そなたは、わしに十字架接吻で〔誓った〕 ことを、【702】 全く何も為してはいないではないか。

こうして、〔リューリク [J2] は〕 かれ〔フセヴォロド [D177:K]〕 に抗議すると、かれ〔リューリク〕 がかつてかれ〔フセヴォロド〕 に与えた、ルーシの地にある父の地の諸城市<sup>48)</sup> をみな取り上げてしまい、それを自分の兄弟たちに分け与えた。

その年の冬<sup>49)</sup>、ノヴゴロド人はヤロスラフ・ウラジーミロヴィチ [D1153] をノヴゴロドから追放した。そして、多くの者がスーズダリのフセヴォロド [D177:K] のもとに派遣された。かれら〔ノヴゴロド人たち〕 は、かれ〔フセヴォロド〕 の息子か、他の誰かを、自分たちのもと

---

46) この、フセヴォロド [D177:K] が1195年に行った、ルーシの地の「分け前」の要求をめぐる経緯については、〔イパーチイ年代記(8)：注476〕を参照。

47) 1196年いっぱい、何の共同行動も起こそうとしなかったということ。

48) 1195年にリューリク [J2] がロマン [I11] から取りあげてフセヴォロド [D177:K] に引き渡したロシ川流域の五つの城市、すなわち、トルチェスク、コルスン、ボグスラヴリ、トレポリ、カーネフを指している (〔イパーチイ年代記(8)：注476〕を参照)。

49) 1196/1197年の冬に相当する。なお、同年代記6704(1196)年の記事によれば、ヤロスラフ [D1153] の追放は「秋のゲオルギオスの祝日」(осенний Юрьевъ день) すなわち11月26日に行われたとしている (〔НПЛ: C. 43, 236〕〔ノヴゴロド第一年代記 XV: 27頁〕)。

に〔公として〕派遣するよう請願した<sup>50)</sup>。しかし、フセヴォロド [D177:K] はかれらの要望を適えなかった<sup>51)</sup>。そこで、かれら〔ノヴゴロド人たち〕はチェルニゴフのヤロスラフ・フセヴォロドヴィチ [C412] のところにやって来て、かれ〔ヤロスラフ〕の末の息子<sup>52)</sup>〔ヤロポルク [C4122]〕をノヴゴロドの公座に派遣するよう請願した<sup>53)</sup>。

その年の冬、ロマン・ムスチスラヴィチ [I11] は、ヤトヴァグ人<sup>54)</sup>を討伐する報復の遠征に出発した。〔ヤトヴァグ人が〕かれ〔ロマン〕の領地で掠奪を行っていたからである。こうして、ロマン [I11] はかれらの土地に侵攻した。かれら〔ヤトヴァグ人〕はかれ〔ロマン [I11]〕の力に立ち向かうことができず、自分たちの砦の中に逃げ込んだ。ロマン [I11] は、かれらの領地を焼き払い、報復をして、帰郷した。

#### 6705 [1197] 年

ロスチスラフ [D116:J] の息子で、大いなる公ムスチスラフ [D11] の孫にあたる、スモレンスクの篤信の公ダヴィド [J3] が逝去した。かれは、最期にあたって望んだ修士の位を受けた。

50) 『ノヴゴロド第一年代記』6703(1195)年の記事によれば、ノヴゴロド市民の間には支配公ヤロスラフ [D1153] への不満が高まり、スーズダリのフセヴォロド [D177:K] のもとに市長官たち要人からなる使節団を派遣して、支配公の交代を請願したが、フセヴォロドはこれを受け入れず、かえって使節団を拘留している ([НПЛ: С. 42, 235][ノヴゴロド第一年代記 XV: 26 頁])。

51) 前注にあるように、ヤロスラフ [D1153] 追放のはるか以前から、ノヴゴロド人は使者を派遣して支配公の交代をフセヴォロド [D177:K] に請願し、拒否されていた。

52) この「末の息子」(сын меншии) はヤロポルク [C4122] を指し、『ノヴゴロド第一年代記』6705(1197)年の記事によれば、実際にかれは1197年3月30日(柳の主日 *вьрьбница*) にチェルニゴフからノヴゴロドに到来し、9月1日(聖シメオンの祝日)までの期間、ノヴゴロドの公座に就いていた ([НПЛ: С. 43, 236][ノヴゴロド第一年代記 XV: 27 頁])。

53) ヤロスラフ [D1153] に好意的な『ノヴゴロド第一年代記』6704(1196)年の記事によれば、「ヤロスラフ公 [D1153] は〔追放後に〕ノーヴィ・トルグへ行き、ノーヴィ・トルグ人はかれを名誉をもって迎えた。ノヴゴロドでは、善き人々はかれ〔の追放〕を惜しんでいたが、悪しき人々は喜んでいた。〔ノヴゴロドの〕人々はチェルニゴフのヤロスラフ [C412] のもとに、その息子を迎えにやった。ノヴゴロドではひと冬のあいだ〔1196/1197年冬〕は公がいなかった」とある ([НПЛ: С. 43, 236][ノヴゴロド第一年代記 XV: 27 頁])。つまり、ノヴゴロド市民の間での、スーズダリ(フセヴォロド [D177:K]) 派とチェルニゴフ(ヤロスラフ [C412]) 派の争いで後者が勝利した結果、ヤロスラフ [C412] の息子を支配公として招請したのである。ただし前注にあるように、息子のヤロポルク [C4122] はすぐには派遣されず、1196年11月27日～1197年3月29日の「ひと冬のあいだ」は、ノヴゴロドに支配公は不在だった。

54) ヤトヴァグ人(ятвяги) は言語的にはリトヴァと同じバルト語族に属し、ヴォルィニ公領の北、ポロツク公領の西に隣接した地域に居住していた。本年代記では、1112年に、ヴラジミル＝ヴォルィンスキイ公のヤロスラフ [B32] がヤトヴァグ人(ятвяги) 討伐遠征を行った ([イバーチイ年代記(1): 251 頁, 注 45]) と記されて以降、この部族についての言及はない。

4月23日の殉教者聖ゲオルギオスの祝日<sup>55)</sup>のことだった。

スモレンスクの主教シメオンとすべての典院と司祭たち、かれの甥のムスチスラフ・ロマノヴィチ [J12] とすべての貴族たちは【703】、神を讃美する聖歌を唱い香り豊かな香炉をくゆらせながら、かれの遺体を見送った。そして、かれの遺体を布で巻き、キリストのための殉教者聖者ボリスとグレーブ教会に、父親の祝福を受けながら安置された。なぜなら、この教会はかれの父ロスチスラフ [D116:J] が創建したのだから<sup>56)</sup>。

この篤信の公ダヴィド [J3] は、年齢は壮年で、容貌は美しく、あらゆる徳で飾られており、善き徳をそなえ、キリストを愛し、万人を愛していた。あるときは自分の魂のことを思い、率先して施しをなし、修道院の世話をし、修道士を慰め、すべての典院たちを親愛をもって受け入れ、かれらから祝福を受け、俗世の教会の世話をし、主教たちにしかるべき敬意を払っていた。戦争においては勇猛で、つねに大業を目指して努め、金銀を〔自分のために〕蓄えることをせず、従士たちに与えていた。従士たちを愛していたのである。また、帝王のなすがごとく、悪しき者たちを処罰した<sup>57)</sup>。

かれは、神の軍司令官〔大天使〕ミハイル教会<sup>58)</sup>に毎日通うことを日課としていた<sup>59)</sup>。これは、

---

55) 日付はイパーチイ写本では日付は「24日」だが、フレーブニコフ写本は「23日」になっている。聖ゲオルギオスの祝祭日は4月23日であることから、後者の読みを採用した。

56) 「ボリスとグレーブ教会」(церковь святыю мученику Христову Борису и Глебу)は、下注63に言及されているように、スモレンスクの内城(Соборная гора)から西へ3kmほど離れたスミャディニ川(Смядьнь)の岸辺の修道院に建てられていた教会。現在は川も建物も存在しない。この修道院については、『ノヴゴロド第一年代記』6646(1138)年の記事で、スモレンスク人がスヴァトスラフ[C43]を捕らえて「スミャディニ川のほとりの修道院」に監禁した([НПЛ, 1950: С. 25])という記事があり、ロスチスラフ・ムスチスラヴィチ[D116:J]がスモレンスク公だった期間(1125~1154年)に建てられたことが推定できる。「ボリスとグレーブ教会」については、『ノヴゴロド第一年代記』6653(1145)年の記事に「この年、スモレンスクのスミャディノにおいて、ボリスとグレーブ教会が定礎された」([НПЛ, 1950: С. 25])とあり、おそらく石造りの教会の建立もロスチスラフ[D116:J]の主導によることは明らかである。

57) この段落のダヴィド公[J3]に向けた讃詞の表現は、かれの三人の兄弟、1170年のスヴァトスラフ[J4]の死亡記事の中の讃詞([イパーチイ年代記(6):290頁,注633])、1178年に死去したムスチスラフ[J5]([イパーチイ年代記(7):244頁,注457])1180年に逝去したロマン[J1]に対する讃詞([イパーチイ年代記(7):255頁,注527])と共通の表現が多い。これらが共通して「ロスチスラフ一族」に近い年代記記者の手による記事であることは明らかである。

58) 「神の軍司令官ミハイル教会」(церкви святого архистати́га Божия Михаила)は、スモレンスク内城(Соборная гора)から西へ2.3kmほど離れた現在のスヴィルスカヤ(Свирская)地区にあり、大天使ミハイルの奇蹟に奉獻された聖堂と推定されている。建立の推定年代は1180~1197年。[Воронин, Раппопорт 1979: С. 163]。

59) このダヴィド[J3]のミハイル教会への特別な配慮は、父親のロスチスラフ[D116:J]の洗礼名が「ミハイル」であることから、一族にかかわる聖堂だったことと関連しているかもしれない[Литвина, Успенский 2006: С. 600]。

かれ自らが公座にあったときに創建したものである。この様な教会は北方の国には他になく、誰もがみなここにやって来ては、その並外れた美しさに驚嘆していた。そこにあるイコンは、金・銀・真珠【704】・宝石で飾られており、あらゆる恩寵に満ちていた<sup>60)</sup>。

さて、われらは前の話に戻ろう<sup>61)</sup>。

〔死を前にしたダヴィド [J3] 公は〕、神の像とあらゆる聖なるイコンを見て、悲しみに満ちた謙抑の心によって自らの像を穏やかにし、心から息をつき、自らの顔を涙で濡らし、あたかも創造主自身であるかのように眺め、ダヴィデ王の改悛を受け入れ<sup>62)</sup>、自らの罪を嘆きながら、こう言った。「神よ、かつてあなたが盗賊や淫婦や取税人を義とされたように、わたしを義として下さい。わが主なる神よ、わが罪を浄め給え」。また、〔ダヴィド [J3] は〕自分の心の中でこう祈願した。「どうか、神がわたしを修道士の地位に定め、煩い多き現世と、はかないこの世からわたしを解放して下さいますように」。そして、すべての思慮をその智恵の中に置いた。神はかれの望みを蔑ろにせず、かれを自らの選ばれた修道士たちの群れに加えた。かれは、創造主から然るべき自らの天使の位階を受けて、魂と肉体をもって歓喜した。公妃は、かれが修道士の位階を受けたことを見て、自ら剃髪して修道女となった。

ダヴィド [J3] はその公座を、自分の甥であるムスチスラフ・ロマノヴィチ [J12] に与えた。かれ〔ダヴィド〕は、自分の息子コンスタンチン [J33] をルーシへ送り、自分の兄弟のリューリクの手に委ねた。【705】

そして、病み衰えたかれ〔ダヴィド〕自身は、スミヤディニ (Смядынь) の修道院へ、殉教者聖ボリスとグレーブ〔教会へ〕<sup>63)</sup> と運ばれて行った。かれは、修道院に入ると、両手を天に挙げて、祈りながらこう言った。「主宰よ、主よ、わが主なる神よ、わが非力なるを見給え、わが謙抑なるを見給え、今われを支え給え。わたしは、あなたに期待して堪え忍び、すべてについてあなたに感謝します、主よ、あなたがわたしの魂をへりくだらせて下さったのですから。あなたは、至浄なる御母、預言者、使徒、殉教者、すべての父なる聖人たちの祈りによって、わたしをあなたの王国に与る者として下さいました。それは、苦しみを受ける者や神に適う者

60) この段落のダヴィド [J3] の創建したミハイル教会の記述は、キエフ府主教イラリオンのウラジーミル聖公 [08] への讃詞である『律法と恩寵についての説教』のウラジーミル聖公のソフィア聖堂建設の記述 (〔БЛДР Т. 1: С. 50〕) と酷似しており、影響関係は明白である [Толочко П. 2003: С.143]。これによって、この記事がミハイル・ヴィドピツキ修道院典院モイセイの手になることが分かる (下注 111 参照)。

61) この個所まで「讃詞」が挿入されたことから、その前 (注 56) のところまで戻るということ。

62) ここでダヴィデ王 (Давид цесарь) が言及されているのは、ダヴィド公 [J3] の守護聖人であることによっているだろう。

63) この「ボリスとグレーブ教会」については、上注 56 を参照。

たちが悪魔の惑わしから贖われこと、黄金が坩堝の中で精練されることと同じです。主よ、そのかれらの祈りによって選ばれた者の群れの羊として、あなたの右手に置いて下さい」。

かれの生命はその〔最期の〕日まで続き、やせ衰え、息が絶えるほどに憔悴していながら、かれは天を仰いで、神を讃美しながら言った。「不死なる神よ、あなたを讃美し、すべてを委ねます。あなたは万人にとって唯一の王であり、全ての創造物を真理に導き、その愉楽のために富を創り出しました。あなたはこの世を護りながら、この世から使者のごとく魂がやってくるのを待ち受けて下さるのです。そして、善き人生を生きた者には神は恵みを与えて下さいます。あなたの戒律【706】に服さなかった者たちは、裁きに引き渡すのです。あなたの裁きはすべて正義であり、あなたの恩寵による生命には終わりはありません。あなたは、慕い寄って来る者たちすべてを慈しむのですから」。

〔ダヴィド [J3] は〕 こうして祈りを終えると、両手を天に向けて挙げて、その魂を神の手に引き渡した。自分の父、自分の祖父の仲間に加えられ、生き年生ける者が償うべき万人に共通の負債を払ったのである<sup>64)</sup>。

スモレンスクにおけるかれの公支配は 18 年だった。その年齢は、60 歳から 3 年を引いた歳だった<sup>65)</sup>。

その年の 12 月 6 日、篤信の公リューリク [J2] は、ベルゴロドで聖使徒たちの石造りの教会を創建した<sup>66)</sup>。かれは、キエフから〔ベルゴロドへ〕 やって来た。石造りの聖使徒教会を献堂したのは、ベルゴロドの主教管区であり、府主教の福者ニキーフォル<sup>67)</sup> と主教アドリア

---

64) この表現は、ロマン [J1]、スヴァトスラフ [J4]、ムスチスラフ公 [J5] の死亡記事における讃詞と多くの点でテキストが共通しており (上注 57 参照)、ロスチスラフ [D116:J] 一族に近い編者が、この記事編集するときに、先行記事の兄弟への讃詞をそのまま利用した可能性が高い。

65) ダヴィド [J3] は、兄ロマン [J1] の死にともなって、1180 年夏～秋にスモレンスクの公座に就いており ([イパーチイ年代記 (7): 254 頁, 注 523] 参照)、確かに公支配の 18 年目に死去したことになる。また、享年は 57 歳であることから、ダヴィド [J3] の生年は 1141 年頃と推定することができる [Домбровский 2015: С. 444]。

66) ベルゴロドの「聖使徒教会」(церковь святых апостолов) は、1144 年に木造の聖堂が建てられており ([イパーチイ年代記 (2): 330 頁, 注 253] 参照)、ここの「創建した」(созда) は、木造の聖堂を石造りの聖堂に建て替えたことを指している。

67) ニキーフォル〔二世〕は 1182 年から 1201 年までキエフ府主教。「福者」(блаженный) という呼称は、府主教に近い者の立場からの尊称だろう。

ン<sup>68)</sup> (Андрѣян) によって献堂された。この教会の座を守るのはユーリエフの主教だった<sup>69)</sup>。

この教会が篤信のキリストを愛するリューリク・ロスチスラヴィチ公 [J2] の手で創建され、その高さと偉容と様々な装飾は、万人を驚かせ、教区の人々は「愛するものよ、〔あなたは〕すべて善きものであり、あなたの中に欠点はない<sup>70)</sup>」と言っていた。

その時、公〔リューリク〕は、考えを一つにする【707】公妃、神のはからいから子供たちとともに、霊的な宴席を設け、ユーリエフの主教アドリアン、洞窟修道院の掌院<sup>71)</sup> のヴァシーリイ、ヴィドピチの聖ミハイル修道院の典院モイセイ<sup>72)</sup>、その他の典院や修道士たち、長老たち、すべての聖職者にある者たちを招待した。また、少なからぬ贈物を用意し、老若貴賤を問わずみなを供応した。求める者は誰一人として拒まなかった。

その年、神を愛する大いなる公リューリク [J2] は聖ヴァシーリイ教会をキエフの新しい館<sup>73)</sup> に創建した。これは、かれの〔洗礼〕名の〔聖人に〕献じた教会だった<sup>74)</sup>。聖堂の大いなる献堂式は府主教ニキーフォル、ベルゴロド主教アドリアン<sup>75)</sup>、ユーリエフの主教<sup>76)</sup> によって執り

68) 「アドリアン」(Андрѣян, Адриан) は、1190年にベルゴロド主教になり ([イパーチイ年代記(8): 243頁, 注356]), 当時はベルゴロドとユーリエフの両主教区を兼任して主教の座に就いていた。かれはヴィドピチの聖ミハイル修道院典院だった時にはリューリクの聴罪司祭を務めており、リューリクとはもっとも親しい聖職者のひとりだっただろう。

69) すなわち、前注のアドリアンのことを指している。

70) この文言は、『雅歌』4:7の句 *вся добра еси, ближняя моя, и порока несть в тебе* (恋人よ、あなたにはなにかも美しく、傷はひとつもない) を部分的に改変した引用であり、女性名詞である教会を恋人に比した讃詞になっている。

71) キエフ洞窟修道院の典院(修道院長)に対する「掌院」(архимандрит)の呼称については、[イパーチイ年代記(8): 注31]を参照。なお、イパーチイ写本にはこのあとに「主教の」(епископа)の語があるが、典院と主教を兼ねることは通常あり得ないことから、フレーブニコフ=ボゴージン写本の読みに従った。

72) 年代記研究の定説によれば、このキエフの「ヴィドピチ修道院の典院モイセイ」(Моисѣи игумен святого Михаила Выдобычского)が「キエフ年代記集成」の最終編集者と考えられている。

73) この「新しい館」(Новый двор)は、6702(1194)年の記事にスヴャトスラフ [C411:G] の臨終の床の場所として言及がある ([イパーチイ年代記(8): 注455]参照)。正確な場所については諸説があるが [Каргер 1958: С. 272-273], キリル修道院の近くにあった可能性が高い (下注77も参照)。

74) リューリク [J2] の洗礼名がヴァシーリイ (Василий) であることについては、本年代記 6707(1199) の記事に、リューリク [J2] のことを「ロスチスラフ [D116:J] の息子として、神聖な洗礼によって聖霊からヴァシーリイと名付けられた御方」と呼んでいることから確認することができる (下注87参照)。1月1日はカエサリアの主教聖大ヴァシリオスの祝祭日であり ([Литвина, Успенский 2006: С. 603-604]), 献堂式をこの日にあわせたのである。

75) 「アドリアン」(Андрѣян)については上注68を参照。

76) この「ユーリエフの主教」(и Юрьевскимъ епископомъ)はアドリアン(アンドレアン)(上注68)のこと。記事にあとからこの語句を挿入したために、あたかも別人のようになってしまったのだろう。

行われた。1月1日のことだった<sup>77)</sup>。

その年、大いなる公フセヴォロド [D177:K] に末の息子が生まれた。8月1日<sup>78)</sup>のことだった。洗礼名を洗礼者ヨハネの受胎に倣ってイオアン [K7] と名付けた<sup>79)</sup>。ヴラジミル[クリャジマ河畔の]の城市ではその誕生を祝って大いなる喜びがあった。

## 6706 [1198] 年

チェルニゴフの公ヤロスラフ・フセヴォロドヴィチ [C412] が逝去した。主教、寺院たち、かれの甥たちは、かれの遺体を尊い布で巻き、主教座の聖救世主教会<sup>80)</sup> に安置した。

これによって、かれの〔チェルニゴフの〕公座【708】には篤信の公イーゴリ・スヴァトスラヴィ

---

77) このリュウリク [J2] による「ヴァシーリイ教会」創建 (созда) の記事は、1185 年 1 月 1 日のスヴァトスラフ・フセヴォロドヴィチ [C411:G] による同名の「ヴァシーリイ教会」の献堂 (освящение) の記事 ([イパーチイ年代記(8): 注 120, 121] 参照) と、教会名、日付、キエフの館 (двор) 付きという場所まで類似している。つまり、本記事は明らかに 1185 年の聖堂献堂の記事の準拠して書かれている。先行して記されているリュウリクによるベルゴロドの「聖使徒教会」の創建が、木造から石造りへの建て直しであったこと (上注 66 参照) を考えると、この記事の「創建」も従来あった木造の「ヴァシーリイ教会」(1185 年にスヴァトスラフ [C411:G] が献堂したもの) を石造りの聖堂に建て替えたことを示している可能性が高い。

その場合、教会の場所については、1185 年の聖堂献堂の記事では「大いなる館」(つまりヤロスラフの館 [宮殿]) のところとなっているが、本記事では「新しい館」(上注 73) となっており異同がある。「新しい館」がキリル修道院に接したスヴァトスラフ [C411:G] 専用の館である可能性が高いことから、ここは「大いなる館」(великий двор) の誤記と考えるべきだろう。

78) フレーブニコフ写本では、日付は 8 日になっている。これは重要度が低いため 6706(1197) 年の項の最後におかれた記事だが年代の特定は迷うところである。『ラヴレンチイ年代記』の 6706(1198) 年の記事には、「この年、篤信の公フセヴォロド・ユーリエヴィチ [D177:K] に息子が生まれた。8 月 28 日の聖なる教父エチオピアの聖なる教父モイセイの祭日のことだった。かれは、洗礼名をイオアン [K7] と名付けられた」([ПСРЛ Т.1, 1997: Стб. 414]) とあり、この場合、1198 年 8 月 28 日のこと考えられることから、1198 年 8 月の出来事と考えるべきだろう。

79) 「洗礼者ヨハネの受胎」(Зачатие Иоана Крестителя) の祝祭日は教会暦では 9 月 23 日に相当することから、この祭日にならって「イオアン」(Иоан) (イワン (Иван)) と命名したというこの記述は不思議である。かりに『ラヴレンチイ年代記』に従って(前注) 誕生日を 8 月 28 日とするならば、その翌日 8 月 29 日が「前駆者(洗礼者)ヨハネの斬首」の祭日にあたり、その前夜に誕生したことから、この聖人にならって名付けられたという推定も可能になる。ただし、この解釈も誕生の日時を定める決定的な論拠ではない。

80) 「聖救世主教会」については上注 37 を参照。

チ [C432] が座した<sup>81)</sup>。

その年の冬、ロスチスラフ・リユーリコヴィチ [J21] に娘が生まれた<sup>82)</sup>。〔洗礼〕名をエフロシニアと名付けた。その通称はイズモラグド (Измолагдъ) で、これは宝石の名前である<sup>83)</sup>。キエフとヴィシエゴロドでは大いなる喜びがあった。ムスチスラフ・ムスチスラヴィチ<sup>84)</sup> [J51]、幼子の伯母のブレドスラヴァ<sup>85)</sup> (Передъслава) もやって来た。二人は幼子を祖父と祖母のところ〔キエフ〕に連れて行った。こうして、かの女はキエフの丘で養育された。

### 6707 [1199] 年<sup>86)</sup>

篤信の大いなる公リユーリク・ロスチスラヴィチ [J2] は、自分の娘フセスラヴァ (Всеслава) を、

81) 6676(1178)年の記事で、チェルニゴフ公オレーグ・スヴァトスラヴィチ [C431] の死後、ヤロスラフ [C42] がチェルニゴフの公座に就き、イーゴリ [C432] はノヴゴロド=セヴェルスキイの公座に就いている ([イパーチイ年代記 (7): 248 頁, 注 479] 参照)。このような、伯父ヤロスラフ [C42] ⇒甥イーゴリ [C432] の年長制序列による公座の継承が、今回も行われたことがわかる。

82) ロスチスラフ [J21] と、1188 年 9 月に結婚したヴェルフスラヴァ (フセヴォロド [D177:K] の娘) ([イパーチイ年代記 (8): 注 289] 参照) との間にできた娘。誕生した場所は、以下の記述から推定してヴィシエゴロドではなかったか。

83) 「イズモラグド」(Измолагдъ) は標準的表記では измарагд (смарагд) で「エメラルド」を示すギリシア語の音写語。リトヴィナとウスペンスキイによれば、5 世紀のアレクサンドリアの殉教聖女エフロシニアがやはり「エメラルドの」(Εὐφροσύνη Σμάραγδος) という呼称を持っており ([Православная энциклопедия Т. 17, С. 505-507: ЕВФРОСИНИЯ Смарагд]) この聖人に倣って命名されたことは明らかである。この聖人の祝祭日は 9 月 25 日と 2 月 15 日と二度あるが、記事に「この年の冬」とあることから、公女エフロシニア=イズマラグドの誕生は 1199 年 2 月 15 日 (前後) だったという推定が成り立つ。リトヴィナとウスペンスキイは、これを公族の女性にも二重名が存在したことの有力な根拠としている [Литвина, Успенский 2006: С. 179-180, 544-545]。

84) ムスチスラフ [J51] は、父ムスチスラフ [J5] の死後、おそらくリユーリク [J2] のもとに引き取られて ([イパーチイ年代記 (7): 243 頁の段落参照) 育ち、長じて側近のような役割を果たしていた。1196 年にはリユーリクによりガーリチへ派遣されている (上注 22 参照)。

85) リユーリク [J2] の娘ブレドスラヴァ (Передъслава) (標準的表記は Предслава) は、ガーリチのロマン公 [I11] と結婚した女性を指すと推定される。かの女は、1188 年に庇護を求めて実の父親の領地であるヴルーチイ、ピンスクヘロマン [I11] の手で派遣されており、それ以降はずっとキエフの父親リユーリク [J2] のもとに身を寄せていたのだろう。かの女についてはまた、以下のミハイル修道院の石壁完成の祝いに参列した公族の一人としてその名が言及されている (下注 105 参照)。

86) フレーブニコフ=ポゴージン写本ではこの年紀が記されておらず、代わりに「その年」(Того ж лѣт) となっている。その場合、以下の記事は 6706(1198)年の出来事だという解釈も成り立つ。ベレジコフはこれを 1198 年のこととしている [Бережков 1963: С. 210]。

ただし、聖ミハイル教会石壁定礎の年が 1199 年 7 月 10 日であることは確かなので (下注 89 参照)、イパーチイ写本の年紀のほうが適合しているとも言える。

リャザンのヤロスラフ・グレーボヴィチ [H1] に嫁がせた。

その時、神はわれらに新たに慈悲をお示しになり、そのひとり子たるわれらが主イエス・キリストの恩寵と至浄にして生命を与える聖霊の恩寵によって、大いなる公リューリク [J2] の神の恵み満ちた心に、善き考えをもたらしした。これは、ロスチスラフ [D116:J] の息子として、神聖な洗礼によって聖霊からヴァシーリイと名付けられた御方に与えられたのである<sup>87)</sup>。

そなた [リューリク [J2]] は、至福の忠実な [神の] 僕として、喜んでその [考えを] 受け入れた。そして、速やかにこの事業を深めようと努力し、自分の才を隠そうと<sup>88)</sup> もしなかったのである。

その年の7月10日<sup>89)</sup>のニコポリスの四十五殉教聖人の祭日のこと、【709】[リューリク [J2] は] 土曜日の巡行<sup>90)</sup>に出ると、ドニエプル川河岸のヴィドビチ (Выдобичи) にある聖ミハイル教会の周囲に、石造りの壁の建築の定礎を行った。

多くの者たちは古きことを敢えて考えようせず、この事業に取り組もうとはしてこなかった。この教会が創建されて以来 111 年を経えており<sup>91)</sup>、その間に多くの支配公がやって来た。それはキエフの公座に就いている者たちで、かの敬神家フセヴォロド [D] 以来のことである。かれ [フセヴォロド [D]] は一族の教会として [ミハイル教会を] を建設し、すでに 4 代を経ていた。しかし、これまではどの代になっても、かれ [フセヴォロド [D]] のこの場所 [教会] への愛情を受け継ぐ者はいなかった。

---

87) リューリク [J2] の洗礼名が「ヴァシーリイ」(Василий) であることは、1198 年 1 月 1 日に「自分の名に献じた」聖ヴァシーリイ教会を建立した (上注 74) ことから確認できる。

88) 「才を隠す」(скрывшии талант) は福音書 (『マタイによる福音書』 25 章) のタラント銀を隠した僕についてのたとえ話を踏まえている。

89) 7 月 10 日は、4 世紀初頭のローマ帝国領アルメニアのニコポリス (現在のトルコ北東部シ瓦斯 (Sivas) 県のコイルヒザル (Koyulhisar) に相当) で殉教した 45 人の聖人の祝祭日。1199 年の 7 月 10 日は確かに土曜日に相当していた。石壁の完成が 9 月 24 日で、定礎から完成まで期間が短すぎるので、定礎は 1198 年とする説もあるが [Бегунов 1974: С. 61]、以下に見るように精力的で時機を得た建設 (下注 94) であることから考えて、2 ヶ月での建築終了は不思議ではない。

90) 「土曜日の巡行」(суботе же имуши путь) の表現は、「安息日にも歩くことが許される距離を行く」(『使徒行伝』 1:12) からの引用で、キエフの丘の館から近いミハイル修道院に出かけたという意味あいとともに、リューリク [J2] を聖書の使徒に比して称揚していることがわかる。

91) ヴイドヴィチのミハイル教会 (Михаило-Выдубицкая церковь) の定礎については、『原初年代記』 6578(1070) 年の記事に「この年、フセヴォロド [D] の修道院の中に聖ミハイルの教会が定礎された」([ПСРЛ Т. 1, 1997: Стб. 174] [ロシア原初年代記: 199 頁]) とあり、6596(1088) 年の記事には「フセヴォロド [D] の修道院の聖ミハイル教会が、府主教イオアンによって献堂された」([ПСРЛ Т. 1, 1997: Стб. 207] [ロシア原初年代記: 230 頁]) とある。聖堂が完成 (献堂) した 1088 年から数えると、石壁を定礎した 1199 年はちょうど 111 年目に相当する。

神によって賢明なこのリユーリック公は、かの御方〔フセヴォロド [D]〕から五代目の世に  
あたっていた<sup>92)</sup>。それは、義人ヨブがアブラハムから〔五代目にあたる〕書かれているの  
と同じだった<sup>93)</sup>。フセヴォロド [D] はウラジーミル [D1] を生み、ウラジーミル [D1] はムスチス  
ラフ [D11] を生み、ムスチスラフ [D11] はロスチスラフ [D116:J] を生み、ロスチスラフ [D116:J]  
はリユーリック [J2] とその兄弟を生んだのである。兄弟たちも善良で神を愛し、あるものはか  
れ〔リユーリック [J2]〕より年長で、ある者は年少だった。しかし、神はかれら〔兄弟たち〕に  
壁の建設の事業をさせなかった。なぜなら、何事にもその時機があるからである<sup>94)</sup>。このキ  
リストを愛するリユーリック [J2] は、若年のころから肉においては子供たちを設けたが、かれら  
についてはこれを語る時機ではない。そして、〔リユーリックは〕霊においては、かれを受け継  
ぐ者を多く成長させた。

その〔受け継ぐ者〕については〔ダヴィデ〕王がこう伝えている。「〔わたしは〕この日より  
そなたになそう。主よ、わが救いの業の真実を伝えよう」<sup>95)</sup>。このように。かれの〔リユーリ  
ク [J2]〕**[710]** 智恵への愛は主への畏れから起こり、その節制は確たる基礎を置いた。その清廉  
さはヨセフに倣い、徳行はモーセに倣い、温順はダヴィデに倣い、義しき信仰はコンスタンティ  
ノス〔大帝〕に倣い、他の徳目は主宰〔キリスト〕の戒律を守ることによって実行していった。

この者たちはこのように賢慮を重ね、毎日祈りをなして、〔神の〕庇護を受け、慈愛を受け  
ていた。これは、大いなる者から小さき者まで、窮乏ゆえに求める者には施しが与えられ、修  
道院と教会には寄付が与えられ、住居を失った者には愛情が示されるのと同様である。

このようにして、キリストを愛する〔リユーリック [J2] の〕公妃、その名は神の母の母親に倣っ  
てアンナ<sup>96)</sup> (Анна) という恩寵の名を得ていたが、かの女はくじけることなく、教会への布施  
や、侮辱を受けた者、力のない者、すべての貧しき者への施しを行っていた。二人〔リユーリ  
ク公と妃〕は力をあわせて、族長のごとき働きをなし、報いを与える者から冠を受け、福音書

92) 以下にあるように、フセヴォロド [D] ⇒ウラジーミル・モノマフ [D1] ⇒ムスチスラフ [D11] ⇒ロスチスラフ [D116:J] ⇒リユーリック [J2] の5代の系譜を指している。

93) 旧約聖書教会スラブ語訳では、『ヨブ記』の最後の章 (42:17) のあとに追加の文言が付されており、その中に「〔ヨブの〕父親はザレフで、母親はヴォソラだった。それゆえ、かれ〔ヨブ〕はアブラハムから5代目なのである。」(Бъ же той отца убо Зарефа, Исавовых сынов сын, матери же Восорры, якоже быти ему пятому от Авраама.)との記述があり、これを受けている。追加文言によれば、アブラハム⇒イサク⇒エサウ⇒ザレフ⇒ヨブという系譜をたどることができる。

94) 「何事にもその奉仕の時機があるからである」(время бо требоваше слугы своего) は『伝道の手記 (コヘレトの言葉)』3:1の文言を踏まえた表現。

95) 『詩編』21:32もしくは70:15 (邦訳71:15)の語句をを改変した文言。

96) リユーリック [J2] の妃アンナ (Анна) は、1172年頃にリユーリック [J2] が再婚した相手で、トゥーロフ公ユーレイ・ヤロスラヴィチ [B321] の娘と推定される [Войтович 2006: С. 360, 520]。[イバーチイ年代記 (8): 注 285] も参照。

で告げられている至福<sup>97)</sup>を味わった。かれら〔二人〕はこれを受け継ぐと、神に使わされた子供たちにこれを教えた。そして、大いなる公リユーリク [J2] はこれら以上の大きなことをなし、大いに努力した。かれは、その勤労への愛によって、さきに述べた軍司令官聖ミハイル【711】の修道院への道先祖たち以上に歩んだ。かれは、このことを、神の智恵による事業における知見によってはっきりと示した。なぜなら、ミロネグ (Милонѣгъ)、洗礼名ペトル (Петръ) という技師<sup>98)</sup>をその支持者たちの中から見出したのである。それは、昔、モーセがかのベツアルエル (Веселѣил) を〔選んだのと〕同じである<sup>99)</sup>。〔リユーリク [J2] は〕神の心に適う事業のために技術者を任命し、先に述べた石壁〔建設〕のための職人たちを〔選んだ〕。

こうして建築に取りかかったが、尊い聖堂を正確に観察するだけで、誰からの援助も必要とせず、ただ自分自身キリストによって造り、「信じる者はすべてが可能だ」<sup>100)</sup> という主の言葉を思い出していた。

壁の建設は9月24日<sup>101)</sup>の最初の殉教聖女フョークラ (Фекла) の受難の記念日に完成した。

その日、〔聖ミハイル〕修道院に、大いなる公リユーリク [J2]、すなわちヴァシーリイ猊下<sup>102)</sup>が、キリスト教を愛する公妃<sup>103)</sup>、息子のロスチスラフ [J21] とウラジーミル<sup>104)</sup> [J22]、娘のプレドス

---

97) 『マタイによる福音書』5:3-10の「幸福なるかな」(Блаженные)が繰り返される、いわゆる「真福八端」を指している。

98) 「技師」(художник)は文脈から見て壁の建築技師のこと。「ミロネグ」(Милонѣг)という名は『ノヴゴロド第一年代記』1177年の記事に千人長の名として記されおり、広く用いられていたスラブ的な名前である。なお、この技師は、およそ1190年頃、リユーリク公 [J2] の命令によって、オヴルチ (Овруч) で公の庇護聖人に献堂したヴァシーリイ教会 (церковь святого Василия) を建設したという説もある [Раппопорт 1972: С. 82]。

99) 『出エジプト記』31:2を参照。リユーリク [J2] の石壁建設を、31章～40章に描かれているモーセによる幕屋の建設事業と対比している。

100) 『マルコによる福音書』9:23からの引用。

101) この9月24日という日付は、年代記記者がリユーリクの石壁建設事業に比定している、『ハガイ書』(下注116)のゼルバベルによる神殿建設の定礎の日付9月24日(第2章18節)と一致している。年代記記者は、建設完成の日を聖書の日付に合わせて記した可能性が考えられる(ウクライナ語訳の訳注を参照 [Літопис руський, 1989: С. 366, Прим. 11])。

102) この「ヴァシーリイ」(Василии)はリユーリク [J2] の洗礼名(上注87)であり、「猊下」(кюръ)はギリシア語の「主人」を意味する κύριε を音写したもので、本来はビザンツ皇族、高位聖職者などギリシア人に対する尊称に用いられた([イパーチイ年代記(8):注39]参照)。この呼びかけはリユーリクに対する「教会的」な尊称である。

103) アンナ(Анна)妃のこと(上注96参照)。

104) ウラジーミル [J22] は1187年の生まれ([イパーチイ年代記(8):注283]参照)だから、当時は12歳だった。父リユーリク [J2] のもとキエフに住んでいたのだろう。

ラヴァ<sup>105)</sup> (Передьслава), ロスチスラフ [J21] の嫁<sup>106)</sup> 等をともなってやって来た。かれらは〔大天使〕聖ミハイル〔の聖像〕に蜜飯<sup>107)</sup> を献げ、自分たちが力を尽くした仕事が完成したことについて〔感謝の〕祈りを捧げた。ここで、わたしは金口〔イオアン〕の次の言葉を思い出す。「口は力を持たないが、その祈りは善である」。

かれら〔参拝した者たち〕は小さからぬ宴席を設け、食卓は調えられていた。そこで、典院たちや長老たち、教会のすべての位階にある者たち【712】に食事が振る舞われた。また貴賤をとわずすべての者に、そこに招かれた者だけでなく、たまたま居合わせた者にも贈物が与えられた。

そのとき人々は、このようなかれ〔リユーリク [J2]〕の王に相応しい思慮による事業の完成に立ち会うことができたことで、霊的な楽しみを得た。典院モイセイとすべてのキリストによる修道士は、麗しい声で神と〔大天使〕聖ミハイルを讃え、大いなる公〔リユーリク [J2]〕の健康を祈った。それは、あたかも一人の口から発せられているような〔次の〕言葉だった。

「われらの目は今日、奇しきものを見た。われらより前にあった多くの者たちは、われらが見たものをさぞや見たかったでしょう。しかし、神がその公によってわれらに与えてくれたものを、かれらは知らず、聞くこともできませんでした。それは、あなた〔リユーリク [J2]〕がわれらの小さきことを取り上げただけでなく、栄光を持ってわれらを受け入れ、あなたの僕の足下に置いたからなのです。

われら、謙抑なる者たちは、恩恵を受けたときには、あなたに報いるでしょう。あなたがわれらになしたことは、あなたが求めなくてもなすでしょう。ため息と健康、およびあなたによる救済を求める祈りによって。神はあなたに、その働きに対して、慈しみと報酬を与えます。軍司令官〔大天使〕ミハイルも〔同様です〕。あなたは、このミハイルに衷心から奉仕し、キリストのためにみなに対して、君主として慈悲を施したのです。

あなたのよき慣例にならって、われらの不躰な書き物を受け入れ給え。徳行を称賛する言葉の贈物として。あなたは、あなたの治世の宝物を、この中に愛情と欲望を納めました【713】。それは、寡婦が銅貨を二枚献げて<sup>108)</sup>、あなたの慈悲を望んだように。われらは主についての言

105) このリユーリクの娘についてはすでに言及されている。上注 85 を参照。

106) 「ロスチスラフの嫁」(сноха Ростиславль) と訳したのは、正確には「ロスチスラフ [J21] の妻」のことで、リユーリク [J2] から見て「嫁」にあたっている。かの女は、スーズダリ公フセヴォロド [D177:K] の娘ヴェルフスラヴァで、1188 年にロスチスラフと結婚している ([イパーチイ年代記 (8) : 注 289] 参照)。当時はヴィシエゴロドに住んでいたと考えられる (上注 82)。

107) 「蜜飯」(кутья) とは、煮た穀物に蜂蜜を加えた儀礼食で、教会での供物としても用いられた。

108) 『マルコによる福音書』(12:42-44) のエピソードを踏まえている。

葉を語り始めました。これは、われらの智慧が乏しいためではなく、あなたの事業の教訓を理解したからです。

ちょうど、修道聖者メトディオス<sup>109)</sup>が、『今日は神の言葉が実現した』と言っているように。ちょうど、かれ自身がかれの書いたものの中でこう告げているように。『神の賢明さをもつ魂は小さな天空である。まことに、義しき信仰と真の言葉と善き行いによって神の栄光を知る者である。言葉のない存在は共感し自存するが、太陽の光、月の輝き、星の飾りによる者であり、時間によって変わる規則を保持することはできない。ただ、主宰の命令だけがかれの栄光を告げる。あたかも、創造主の善を観る者はすべて、その善き秩序ゆえにそのことを讃美するように』<sup>110)</sup>。

ここには、なによりもあなたについての言葉が語られています。なぜなら、それは尊く、善を愛し、神に対して権威を持つように造られたもので、その栄光は天の星のようであるのですから。それは、ルーシの地の隅々で知られるだけでなく、遠くの海にも存在し、すべての地に広がっています<sup>111)</sup>。それは、預言者〔ダビデ王〕が『その言葉は全地に、世界の果てに向かう』<sup>112)</sup>と言った通りです。

キリストを愛するあなたの諸事業は、それによって万人はあなたの主宰〔神〕を讃美するでしょう。なぜなら、**[714]** あなたたちの善き事業を見た福音書記者は、天に居ますあなたたちの父を讃美したのですから<sup>113)</sup>。

なぜなら、この日々から、神を愛する多くの者は気がついて、怠けることなくあなたの足跡を追って進み、あなたをモーセのごとき先導者としました。〔あなたは〕この新しいイスラエル〔の民〕を無慈悲な奴隷状態から、貧苦の暗黒から導き出したのですから。

---

109) 「修道聖者メトディオス」(преподобный Мефедьи)は、パトラ〔主教〕のメトディオス(Мефодий Пагарский)と通称される3世紀の教会作家を指している。『原初年代記』1096年の記事でも言及されており、かれの黙示録的な著作はルーシで広く読まれた。

110) この言葉は、メトディオスの著作『箴言』における蝨について」のスラブ語訳を典拠としている[Beguнов 1974: C. 72][Мефодий Пагарский 1996: C. 421]

111) この「ルーシの地の隅々から知られるだけでなく、遠くの海にも存在し、すべての地に広がっている」(не токмо и в Руських концехъ ведома, но и сушимы в морѣ далече, во всю бо землю изнидоша)は、11世紀のキエフ府主教イラリオンのウラジーミル聖公[08]への讃詞である『律法と恩寵についての説教』(Слово о законе и благодати)の中の次の句、「しかしルーシでは、その地の四隅のあらゆる者が聞いて知っている」(нѣ въ Руськѣ, яже вѣдома и слышима есть всѣми четырьми конци земли)[БЛДР Т.1: C. 43-44]の文言に類似しており、影響関係が想定される([Толочко П. 2003: C. 141]も参照)。

112) 『詩編』18:5(邦訳19:5)からの引用。

113) 『マタイによる福音書』6:9もしくは『ルカによる福音書』11:2の、いわゆる「主の祈り」の文言を指している。

なぜなら、これ以降は〔ドニエプル川の〕岸辺に立つことはもはやなく、あなたが建設した壁の上で、わたしは、あなたに勝利の歌を唱いましょう。その昔、ミリアムが唱ったように<sup>114)</sup>。

今日、イザヤが言うように鳥々は回復されました<sup>115)</sup>。そして、わたしは言います、義人たちは、主の尊い聖堂の回復をその目で見ると。あなたの主への確信は、あたかも、ゼルバベル<sup>116)</sup> (Езовавель) の時代に、バビロンでの絶望から解放されたときのごとくです。

今日、多くの信実のキエフ人とその住民たちは、いっそう努めて、主の軍司令官〔大天使ミハイル〕への愛を持つようになるでしょう。それは、自分たちの救いのためばかりではなく、あなた〔リユーリク [J2]〕の支配の日々に起こった新しい奇蹟のためでもあります。なぜなら、あなたは、あなたが建てた建物のうえに自らの両脚を不動に据えて、両眼でこれを楽しげに見つめながら、あらゆるところから魂の喜びを集めたのですから。それゆえ、〔人々は〕あたかも天空に達した思いを抱き、立ち去り難く感じながら、あなたの神の智慧を誉め讃えるのです。見るものがなくとも、信じることで喜ぶ者は幸いです。それはあたかも、ソロモン王が『義人を讃え、人々は喜ぶ』<sup>117)</sup> と【715】言っているがごとくですから】。

〔6708(1200)年<sup>118)</sup>〕

「本日、多くの虚しい思慮と不信心の言葉によって、多くの〔人々〕の心は揺れています。なぜなら、ある者は、黄金の髪の毛によって教会は天から吊されており、それによって支えられていると言っているのですから。また、教会が修道院になり代わると言っている者もいます。その他にも多くのことを〔言っています〕。それらのどれ一つをとっても、そこから慰めを真に得る助けになることはありません。それは、かれのもとに〔大天使聖ミハイルの〕助けがやって来るときに、すなわち、恩寵、かれの似姿を持つ者たちの慈悲、かれに選ばれた者が

114) 『出エジプト記』15:21のモーセの姉妹のミリアムの歌のエピソードを踏まえており、ミリアムがモーセを讃えたように、自分(モイセイ)はリユーリク公を讃えるということ。

115) 『イザヤ書』41:1の「鳥々よ、わたしのもとに来て静まれ」の文言を踏まえている。

116) ここは建設者の比喩になっており、『エズラ記』第3章に、ユダの総督であるゼルバベル等がバビロンの捕囚から帰還したのちにエルサレムに集まって神殿建設に取りかかるエピソードが述べられている。また『ハガイ書』では、預言者ハガイの口を通して、神はゼルバベルの神殿再建の事業を祝福している(2:21)。

117) 『箴言』11:10からの引用。

118) この年紀も上注86と同様に、フレーブニコフ=ポゴジン写本ではなく、イパーチイ写本のみにある。構成から見ると、以下はモイセイの讃詞の中に割って挿入されており、この年紀はいかにも不自然である。

訪問するときに、〔慰めが〕得られるのです。

われらは、施し手であるあなたに負債を負っています。われらの永遠の主人よ。われらは心一つにしてこの選ばれた場所〔聖ミハイル修道院〕に滞在して、〔あなたを〕忘れないことを希望し、あなたから慈悲を乞い求めます。あたかも鹿が泉の水を求めるように。

神の慈悲、父の憐れみ、かれのひとり子の愛、聖霊への与り、〔これらが〕どうか、あなたの王国とともに到来しますように。あなたが愛する者たちと一緒に〔到来しますように〕。そして、軍司令官〔大天使〕ミハイルよ、あなたは羽根で覆うことで庇護し、守り給え。今も、永遠に、来たる世にも。アーメン。】

## 参考文献

- Бегунов 1974 — Бегунов Ю. К. Речь Мойсея Выдубицкого как памятник торжественного красноречия XII в.// ТОДРЛ, 1974, Т. 28, С. 60-76.
- Войтович 2006 — Войтович Леонтий, Княжа доба: Портрели еліти. Біла Церква, 2006.
- Воронин, Раппопорт 1979 — Воронин Н.Н., Раппопорт П. А. Зодчество Смоленска XII - XIII вв. Л., 1979.
- Домбровский 2015 — Домбровский Д. Генеалогия Мстиславичей: Первые поколения (до начала XIV в.). СПб., 2015.
- Каргер 1958 — Каргер М. К. Древний Киев : очерки по истории материальной культуры древнерусского города. Т. 1. М.:Л. 1958 .
- Каргер 1961 — Каргер М. К. Древний Киев: очерки по истории материальной культуры древнерусского города. Т. 2: Памятники Киевского зодчества X - XIII вв. М.; Л., 1961.
- Карпов Материалы — Карпов А. Ю. Материалы для Словаря «Люди Древней Руси. IX—XIII вв.» // <http://www.portal-slovo.ru/history/385/>
- Котляр 2007 — Котляр М.Ф. Структура і джерела Київського літопису XII ст. // «Український історичний журнал» (УІЖ), 2007, № 5, 4–17.
- Літопис руський, 1989 — Літопис руський / Пер. з давньорус. Л. С. Махновця; Відп. ред. О. В. Мишанич. К.: Дніпро, 1989. (<http://litopys.org.ua/litop/lit.htm>)
- Литвина, Успенский 2006 — Литвина А. Ф., Успенский Ф. Б. Выбор имени у русских князей в X-XVI вв. М., 2006.
- Мефодий Патарский 1996 — Библиотека отцов и учителей Церкви. Творения св. Григория Чудотворца и св. Мефодия епископа и мученика. М.1996.
- Православная энциклопедия Т. 1 - 45 — Православная энциклопедия: Т. 1-45, М., 2000-2015. (Электронная версия <http://www.pravenc.ru/>)
- ПСРЛ Т. 1, 1997 — Лавретьевская летопись. (Полное собрание русских летописей. Том первый). М., 1997.

イパーチイ年代記(1) — 中沢敦夫「『イパーチイ年代記』 翻訳と注釈(1) — 『原初年代記』への追加記事(1110 ~ 1117年)」『富山大学人文学部紀要』(61号, 2014年8月) 233 ~ 268頁

イパーチイ年代記(2) — 中沢敦夫, 藤田英実香「『イパーチイ年代記』 翻訳と注釈(2) —

- 『キエフ年代記集成』(1118～1146年)、『富山大学人文学部紀要』(62号, 2015年2月) 287～353頁  
イパーチイ年代記(3) — 中沢敦夫, 吉田俊則, 藤田英実香「『イパーチイ年代記』翻訳と注釈(3) — 『キエフ年代記集成』(1146～1149年)』『富山大学人文学部紀要』(63号, 2015年8月) 329頁～389頁  
イパーチイ年代記(4) — 中沢敦夫, 吉田俊則, 藤田英実香「『イパーチイ年代記』翻訳と注釈(4) — 『キエフ年代記集成』(1149～1151年)』『富山大学人文学部紀要』(64号, 2016年2月) 321頁～372頁。  
イパーチイ年代記(5) — 中沢敦夫, 吉田俊則, 藤田英実香「『イパーチイ年代記』翻訳と注釈(5) 『キエフ年代記集成』(1151～1158年)』『富山大学人文学部紀要』(65号, 2016年8月) 221～308頁。  
イパーチイ年代記(6) — 中沢敦夫, 吉田俊則, 藤田英実香「『イパーチイ年代記』翻訳と注釈(6) 『キエフ年代記集成』(1159～1172年)』『富山大学人文学部紀要』(66号, 2017年2月) 191～298頁。  
イパーチイ年代記(7) — 中沢敦夫, 吉田俊則, 藤田英実香「『イパーチイ年代記』翻訳と注釈(7) 『キエフ年代記集成』(1172～1180年)』『富山大学人文学部紀要』(67号, 2017年8月) 169～268頁。  
イパーチイ年代記(8) — 中沢敦夫, 吉田俊則, 藤田英実香「『イパーチイ年代記』翻訳と注釈(8) 『キエフ年代記集成』(1181～1195年)』『富山大学人文学部紀要』(68号, 2018年2月) 181～279頁。  
スズダリ年代記訳・注 [III] — 「スズダリ年代記訳注 [III]」『古代ロシア研究』22号, 2010年。13～37頁。  
スズダリ年代記訳・注 [V] — 「スズダリ年代記 (『ラヴレンチー本) 訳・注 [V]」『古代ロシア研究』24号, 2017年。11～25頁。  
ロシア原初年代記 — 國本哲男, 山口巖, 中条直樹訳『ロシア原初年代記』, 名古屋大学出版会, 1987年

## 解説『キエフ年代記』の編集史について

### 1. 『キエフ年代記』編集史の研究方法について

年代記研究の上で、『イパーチイ年代記』の6626(1118)年から6707(1199)年までの部分は、一般に『キエフ年代記』(Киевская летопись)もしくは『キエフ年代記集成』(Киевский летописный свод)と呼ばれている。テキストの分量は『イパーチイ年代記』全体のおよそ半分を占め(『原初年代記』は三分の一)、ルーシの政治的中心あったキエフをはじめとして、チェルニゴフ、ペレヤスラヴリ、ガーリチ、スーズダリとその周辺都市などで起こった12世紀のルーシの出来事が、編年体で記されている。

本稿は、そのように大部で内容的に多彩な『キエフ年代記』の編集の過程をたどりながら、この年代記が、誰によって、何のために、どのようにして編まれ、最終的に現在のような形が成立するに至ったかについて概観することを課題としている。12世紀のルーシに関する最重要の史料である『キエフ年代記』については、ロシア・ソビエトをはじめ膨大な研究があるが、ここでは、研究史的な紹介と検討は最小限にとどめ、翻訳作業を通じて得られた本年代記の編集史についての知見と問題点を整理しながら、筆者の考えを述べる方法を採用することにする。

なお、『キエフ年代記』の編集者(たち)を直接に特定できるような証言は、『キエフ年代記』のテキストの中にも、同時代の史料の中にも見出すことはできない。年代記研究では、仮説的に提示された人名や編集者像が一人歩きして、あたかも確定した事実のように扱われることもあるが、本年代記成立の事情については、いまだに定説すらないのが現状である。それゆえ、本稿では、編集者にかかわる間接的な言説を集めて総合し、そこから、編集にかかわる個別の問題についてできるだけ合理的に説明できるモデルを組み立てることを目指す。

まず、年代記の編集史研究の方法について、いくつか基本的な点を整理しておこう。

従来から『キエフ年代記』はその研究において「年代記集成」(летописный свод)と呼ばれてきた。「集成」(свод)とは年代記編集の一つの型のことで、『ノヴゴロド第一年代記(古輯)』のような、同時代の出来事を時間を追って書き継ぎ、それが積み重なって成立する「書き継ぎ型」(постоянно ведущее летописание)の年代記に対して対比的に用いられる用語である。それは、特定の期間に起こった事件に関する様々な資料を編集者が集め、自らの方針にそって資料を取捨選択、改変、結合、編年の配置などの編集を行って成立するタイプの年代記を指している。

『キエフ年代記』は、部分的に「書き継ぎ型」の記事を資料として使っているものの、基本的には「集成型」の年代記である。しかし、12世紀全体をほぼカバーする長期の出来事についての資料が、特定(13世紀初頭)の時点で一気に寄せ集められて、一気に編集されたわけではない。記事を詳しく見ると、その内容、分量、文体などがある程度共通している部分を、

編集の単位として取り出すことができる。つまり、一定の期間の出来事について特定の編集者が資料を集めて年代記を編むが、なんらかの事情（編集者の交替、資料や編集方針の変更など）で中断する。すると、別の編集者が、次の期間について同様に年代記編集を行う。そして、そのように書かれた幾つかの年代記がつなぎ合わされて、長期間にわたる大きな年代記が成立したというのが、『キエフ年代記』の編集過程の基本的なイメージである。もちろん、後代の編集者が先行の年代記に手を入れたり、あとで書いた記事を先行する年代記の個所に挿入したりということは、個別的にはあり得るが、組織的で大幅な改変はないと考えられている。

これと関連して、年代記研究の方法的モデルとして、記事をその特徴から「編年記録」と「物語」という二つのタイプに区別することがある。

「編年記録」(хронологические записи)とは、「書き継ぎ型」の編集によって成立した記事のことである。『キエフ年代記』の場合その内容は、公が行った遠征、建設事業、公族の一員の誕生、結婚、死没、有力な教会活動家の交替、叙任、死没、さらに、天変地異などにかかわるものがほとんどで、主に事実関係が記されている比較的短い記事である。また、「集成型」の年代記でも、編年記録が資料として取り込まれ、年代記記事の一部となっていることが普通にある。

他方で「物語」(повести)とは、「集成型」の年代記に特徴的なもので、公が行った遠征、戦争、交渉、教会の紛争などの政治的な事件とその推移を、ある程度まとまったかたちで叙述したものである。そこでは、公や従士たちの言葉、使者の言葉が直接話法で引用されたり、出来事の細部が描写されている。遠征や事件に参加したり立ち会った公、従士、使者、教会関係者など当事者からの聞き書き、通信や交渉の際に作成された文書やメモなどが資料として用いられている。年代記編集の際にそれらを組み合わせて、一挙に「物語」が書かれたものと考えることができる。さらには、すでに別の場で書かれたまとまった形の「物語」を、年代記編集者が資料として、加筆、削除などの編集を加えて、年代記の記事とするというようなケースも想定できる<sup>1)</sup>。

『キエフ年代記』の記事は「物語」が多い<sup>2)</sup>。興味深いのは、そのような「物語」の中には、事実の叙述にとどまらず、記された人物や事件についての編集者の見解や評価が伴っているものが見いだせることである。そして、編集史の研究において、そのような見解・評価に注目し、検討することによって、年代記編集の方針やその編集者像をある程度知ることができる。また、

---

1) 1147年の「イーゴリ公殺害物語」[349-354]、1175年の「アンドレ公殺害物語」[580-595]がその典型である。

2) コトリヤールは、『キエフ年代記』の基本的な性格を「軍記物語集」として位置づけ、その構成について研究を行っている。Котляр М.Ф. Київський літопис XII століття. Історичне дослідження. К., 2009. С. 10.

天変地異の記録の場合でも、これが神意による予示・予兆と解釈される場合には<sup>3)</sup>、編集者像を探る手がかりとなる。以下の検討でもこのような編集者による評価的な言説を取りあげて、検討していきたい。

本稿ではまた、編集史研究的方法的モデルとして、年代記の成立に関与する当時者として、① 資料提供者、② 記者、③ 編集者の三者を区別して考えたい。

① 資料提供者 (информанты) とは、事件などの当事者や内容を知る者で、その言葉を年代記の記者が書き留めてはじめて記事になる。他で編まれた年代記や公私の文書、メモ書きなどが資料として使われる場合もあり、そのときは文書そのものが資料 (提供者) として、記者や編集者の手に渡ることになる。② 記者 (летописцы) とは、年代記の一部としての記事を書く者だが、普通、その働きだけは年代記は成立しない。書き継ぎ型の年代記や同時代の編集の場合には、記者が編集者を兼ねることはあり得るが、集成型の場合には、両者の役割を区別して考えるべきだろう。③ 編集者 (редакторы) が①②のプロセスで手元に集まった資料・記事を、削除、修正、加筆、配置などの編集を加えることによってはじめて集成型の年代記は成立する。先に述べた、事件や人物についての見解・評価を表明 (挿入) するのも、多くの場合編集者の仕事である。

このような年代記編集の関与者のモデルについて述べるのは、以下の検討の際の用語の整理のためであるが、これまでの編集史研究では、この三者の役割の違いが考慮されず混同されて論じられることが多かったからでもある。そのため、資料提供者がそのまま編集者であるように扱われたり、記者と編集者を区別しないために論述が混乱することが見受けられた。なお、概説である本稿で扱うのは、最終的な集成年代記の成立にかかわる ③ 編集者についてであることを述べておきたい。

## 2. 『キエフ年代記』の編集単位について

さて、従来から、集成型の年代記の編集過程を解明するためには、その内容、傾向、文体を分析することによって、上述の編集の単位を取り出すという方法が伝統的に行われてきた。本稿でもそれにしたがって、『キエフ年代記』の中に、編集の変更にもなう切れ目を見出し、

---

3) 例えば、公族の死の前には、その予兆として「天のしるし」に言及されることがある。1113 年スヴァトボルク [B3] の死 [274-275]、1121 年の日食・月食のつぎにムスチスラフ [D11] の妃の死が続く [286]、1145 年の彗星の出現 [317]、1146 年の遠征の雨とみぞれと、それにつづくフセヴォロド [C41] の死 [319-320]、1161 年の日食 [516] とイジャスラフ [C35] の殺害 [518] など。

編集単位をまず取り出してみたい。そして、取り出された個々の編集単位について、その編集の方針、編集者像、年代記の成立事情などについて、先行研究を参考にしながら検討していきたい。

まず、以下のような編集単位を区別したい。これは、あくまでも方法上の便宜であって、それぞれの切れ目に必ずしも明瞭な内容や編集方針の違いが存在するわけではない。

- (1) 「ウラジーミル・モノマフ一族の時代」(1118年～1140年<sup>4)</sup>) [285-303]<sup>5)</sup>
- (2) 「フセヴォロド・オリゴヴィチの時代」(1141年～1146年) [303-326]
- (3) 「イジャスラフ・ムスチスラフの時代」(1146年～1154年) [327-469]
- (4) 「過渡期の時代」(1154年～1159年) [469-503]
- (5) 「ロスチスラフ・ムスチスラヴィチの時代」(1160年～1168年) [504-532]
- (6) 「ムスチスラフ・イジャスラヴィチとスヴァトスラフ・フセヴォロドヴィチ及びロスチスラフ一族のキエフをめぐる政争の時代」(1169年～1178年) [532-613]
- (7) 「リユーリク・ロスチスラヴィチとスヴァトスラフ・フセヴォロドヴィチの二頭体制時代」(1180年～1194年) [613-681]
- (8) 「リユーリクの時代」(1195年～1199年) [681-715]

それぞれの編集単位にキエフを支配している公の名が付されていることから、キエフ統治の時代区分と錯覚しそうだが、あくまで編集単位の区分である。これは、特定の公が比較的長期間キエフの公座に就いていた時代(時代区分)と編集単位の期間がほぼ対応していることによる。とくに、キエフ公座継承が同じ一族内で行われず、ウラジーミル(モノマフ)一族、オレーグ一族、ユーリイ(手長公)一族など異なった一族の間で交替が起こった時には、年代記の編集傾向も変化していることが認められる。そのことから、キエフの公座を占める有力な公の交替にともなって、年代記の編集者もまた交替したという事態を想定することができる。実際、『キエフ年代記』には、キエフ公の活動や、キエフの公座をめぐる諸公の抗争についての記事が圧倒的に多く、年代記記者や編集者はキエフ公に特別な関心を持っていたことは疑いない。そして、記録され、描き出され、評価される対象である公が代わることによって、記事

---

4) 本稿で示されている西暦の年代表記は、基本的に年代記記事の創世紀元年から5508年を機械的に引き去った数字であり、特定の記事で年代記記者が採用している暦法等は考慮されていない。そのため、実際に事件が起きた西暦年に必ずしも対応しているわけではない。

5) 本稿で角カッコ内に示されている数字は、翻訳の底本としたテキスト(Полное собрание русских летописей: Т. II, Ипатьевская летопись. Изд. 2-е. СПб., 1908.)の欄(столбцы)番号であり、連載翻訳では(3)(紀要第63号)以降で、本文の中に【262】のように示されている。

の内容も編集もまた変わることは容易に想定することができる。

以下では、それぞれの編集単位について、記事の編集がどのようになされているかを概観し、誰によって、どのような方針のもとでそのような編集が行われたのかについて検討していく。

#### (1) ウラジーミル・モノマフ一族の時代 (1118 年 ~ 1139 年) [285-303]

先ず、『キエフ年代記』がどこから始まるかについて考えてみよう。通常、この年代記の始まりとされる 1118 年からの記事<sup>6)</sup> [285] と、これに先行する、筆者が「原初年代記への追加記事」と呼んでいる『イパーチイ年代記』の 1110 年 [262] ~ 1117 年 [285] の記事との間には、その内容や記事の特徴においてはっきりした切れ目を見出すことはできず<sup>7)</sup>、同じ編集による記事と見ることができる。それゆえ「ウラジーミル・モノマフ一族の時代<sup>8)</sup>」の編集単位を取り出す限り、これは 1110 年の記事から始まって 1132 年頃までを扱うべきなのである<sup>9)</sup>。では、なぜ 1118 年から記事が始まるとされるかという点、『原初年代記』研究の中で、写本における 1110 年 ~ 1117 年の記事の違いを、追加的な編集によるヴァリエーション、つまり版の違いと見なしてきたことによる研究史上の慣習に過ぎない。以上を踏まえた上で、先の検討に移りたい。

1118 年 [285] から 1139 年のヤロポルク [D15] の死とヴァチエスラフ [D16] のキエフ公就位までの記事 [303] については、その内容や傾向がほぼ一様であり、記事の性格も似ていることから、共通の編集者(たち)の存在を想定することができる。実際、この期間、キエフの公座を占めたのは、ウラジーミル・モノマフ [D1] (キエフ公在位: 1113 ~ 1125 年)、長子のムスチスラフ [D11] (同 1125 ~ 1132 年)、その弟のヤロポルク (同 1132 ~ 1139 年) [D15] と、モノマフとその二人の息子であり、同じ一族から 3 人続けてキエフ公が出ている。

この編集単位の記事の内容的な共通性に注目すると、基本的にキエフ公であるモノマフ [D1]、ムスチスラフ [D11]、ヤロポルク [D15] とその一族が行った遠征や内争、一族の成員の

---

6) Словарь книжников и книжности Древней Руси Вып.1 (XI - первая половина XIV в.). Л., 1987. С. 236. (Ипатьевская летопись)。ここでは 1119 年を始まりとしているが、1118 年との違いにほとんど意味はない。

7) 中沢敦夫「『イパーチイ年代記』 翻訳と注釈(1) — 『原初年代記』 への追加記事 (1110 ~ 1117 年)」『富山大学人文学部紀要』61 号, 2014 年, 237-239 頁を参照。

8) 近年の研究ではこの部分については『ウラジーミル一族年代記』(летопись Владимирового племени; літопис Володимирова племени)と呼ばれており、本稿でもそれにならった。Толочко П. П. Русские летописи и летописцы X - XIII вв. СПб., 2003. С. 101. ; Котляр М.Ф. Київський літопис XII століття. Історичне дослідження. К., 2009. С. 32, 97-102.

9) そのことは、P・トロチコも指摘している。Толочко П. П. Русские летописи и летописцы... С. 101.

誕生、結婚、死亡の情報、天変地異、主教の交代や聖堂建設など教会関係の記事からなり、モノマフ一族の身辺の情報にはほぼ限られている。また記事の特徴としては、事実だけを伝える、「編年記録」が多く、1115年 [282]～1127年 [290]の期間の記事は、全面的に書き継ぎ型の短い編年記録がそのまま記事として載せられている。

同時に、この部分には「物語」の特徴を持つ記事も見出すことができる。1123年の項には、ヤロスラフ [B32] が、モノマフの息子アンドレイ [D18] の座しているヴラジミルの城市を攻撃したが謀殺された物語がまとまった記事となっている [287-288]。これは、ヤロスラフ [B32] の敗北が「傲慢の罪」による神罰であるという教訓で締めくくられており編集者の事件についての評価が示されている。興味深いことに、ここではモノマフ公が「兄弟たち」に向けた、聖書からの引用を含む謙抑を説く言葉が二箇所、直接話法で引用されていることで [287, 288]<sup>10)</sup>、これによって物語の教訓性が強調されている。

このような戦いの記録と教訓が組み合わされた記事は、1111年の、モノマフ公を主導者とした、サリニツァ川の合戦を中心とするポロヴェツ討伐遠征の物語 [264-273] の聖書からの引用の仕方と類似しており、ここでも、「追加編集記事」との連続性を見ることができる。

1126年の項には、モノマフ公死去を機にポロヴェツ人がルーシの地に襲来したのを、当時ベレヤスラヴリ公だったヤロボルク [D115] が独力で撃退した記事があるが [289-290]、ここでは、ヤロボルクの勝利における「父〔モノマフ [D1]〕の祈り」と神助が強調されており、「追加編集記事」に特徴的だった大天使ミハイルの御利益がここでも言及されている<sup>11)</sup>。

「物語」としては他に、1128年の、フセヴォロド [C41] とその叔父ヤロボルク [C5] とのあいだの争いに介入して、ムスチスラフ [D11] とヤロボルク [D15] がフセヴォロド討伐の遠征を行った記事 [290-291]、これに続くムスチスラフ [D11] が弟たちをはじめとする諸公を集めて、「クリヴィチ」すなわちポロツク諸侯の城市へ掠奪遠征を行った記事などがある [292-293]。

以上の「物語」に見られる公や事件に対する評価の文言に注目すると、モノマフ公 [D1] の徳性を強調し讃美する態度と、そのような徳性が息子たち（ムスチスラフ [D11]、ヤロボルク [D15]、アンドレイ [D18]）に継承されていることを強調する書き方を指摘することができる<sup>12)</sup>。そして、その徳性とは、キリスト教的な「謙抑」（*смирение*）をモノマフ一族の諸公が示すことによって、諸公の争いの融和・和解を促し、キリスト教徒の血が流れるのを回避することによって示される<sup>13)</sup>。反対に、敵対する側は「傲慢」（*гордыня*）の罪に陥っているとされる。

10) 『イパーチイ年代記』訳と註(1), 243頁, 注42,45を参照。

11) 『イパーチイ年代記』訳と註(2), 297頁, 注69を参照。

12) この徳性の継承については、モノマフの息子たちが「父の祈り」（*отца своего молитва*）をたのんで戦ったという表現 [287, 290] にも見て取ることができる。

13) 1123年 [288], 1128年 [291], 1136年 [299], 1139年 [301, 302], 1140年 [302] の記事を参照。

このような人物評価の特徴は、ヤロポルク [D15] の死後、ヴァチェスラフ [D16] がフセヴォロド [C41] にキエフを引き渡したことについての記事 [302-303]、ムスチスラフ [D11] によってコンスタンティノポリスへ流刑されていたポロツク出身の二人の公がルーシへ帰還したことについての記事 [303-304] にも部分的に認めることができる<sup>14)</sup>。おそらく、1140 年 3 月にフセヴォロド [C41] がキエフの公座に就いてからもしばらくの間、同じ編集者が年代記を書き継ぎ、後代になって『キエフ年代記』の中に繰り入れられたのだろう。

さて、「モノマフ一族の時代」の編集単位の後半部分、すなわち 1133 年 [294] ~ 1139 年 [302] の記事は、ヤロポルク [D15] のキエフ公在位の時代に相当しているが、記事の主調が前半部とはやや異なっている。その違いとは、後半部ではペレヤスラヴリにかかわる記事が多くなり、ヤロポルク [D15] が公座を継いだキエフについての記事が相対的に少なくなることである。例えば 1134 年の記事 [295] はすべてペレヤスラヴリに直接のかわりを持ち、1135 年の記事もなんらかのかたちでこれにかかわっている [295-297]。

そのことは、相対的にキエフの出来事への無関心となり、それと関連して、前半部の記者が「モノマフ一族」(モノマフ [D1]、ムスチスラフ [D11]、ヤロポルク [D15] とその兄弟たち) に強いシンパシーを表明していたのに対して、後半部の記者は、ヤロポルク [D15] の側について書いているにせよ、かれの行動を全面的に賛同し讃美してはおらず、やや距離を取っているところもある<sup>15)</sup>。

さて、この編集単位の記事の編集はどこで、誰によって行われたのか。もし、追加編集記事の編集が継続しており編集者の交替はなかったとすれば、シャフマトフが指摘しているように、モノマフ [D1] = ムスチスラフ [D11] の一族に近い修道院が候補になるだろう<sup>16)</sup>。1128 年の、フセヴォロドが叔父ヤロスラフを追放した事件の記事で [291]、聖アンデレ修道院典院グリゴリーは「かってウラジーミル [D1] に愛された人物で、ムスチスラフ [D11] から、すべての家来たちからも尊敬されていた」[291] という記述がある。この編集単位では、この修道院について多く記されており、1131 年には聖アンデレ教会の再建について語られ [294]、1139 年に没したヤロポルク [D15] はアンデレ修道院に安置されており [302]、1145 年には遺体の埋葬記事が記されている [319]。

以上から判断して、この修道院の典院グリゴリーは、モノマフ [D1] とムスチスラフ [D11]

---

14) ヴァチェスラフ [D16] は「血を流すことを望まず」(Ип.1140-2)、ムスチスラフ [D11] は「偉大なウラジーミル・モノマフの労苦を継承した」(Ип.1140-10)と『日誌』に特徴的な指摘がなされている。

15) [296] のオレーグ一族の言葉と、[297] のモノマフ一族とオレーグ一族との抗争についての文言、1136 年のペレヤスラヴリ城下の戦い [298] を参照。

16) 『イパーチイ年代記』 訳と註 (1) の 239 頁を参照。

及びその家族たちの聴罪司祭だった可能性が高く、一族に関する情報をもっとも入手しやすい立場にあっただろう。また、かれの口から「キリスト教徒の血を流さない」というこの編集単位に一貫した理念が直接に語られていることからみても、聖アンデレ修道院において典院グリゴリーイの指導のもとで記事が書かれていたという可能性がある。

同時に、年代記には洞窟修道院についての、内部情報にあたる記事も散見する<sup>17)</sup>。編集者はこの修道院の出来事に強い関心を持っていたことも確かである。それゆえ、『原初年代記』のネストル以来の年代記編纂の伝統が12世紀の30年代になっても続いていたという可能性もまた考慮に入れなければならない。

## (2) フセヴォロド・オリゴヴィチの時代 (1140年～1146年) [303-326]

1139年2月のヤロボルク [D15] の死とヴァチェスラフ [D16] のキエフ入城、それに続く1140年3月のヴァチェスラフからフセヴォロド [C41] への公座引き渡しによって、それまでのモノマフ一族に代わって、オレーグ一族出身のフセヴォロド [C41] がキエフの公座に就くことになった [303]。これ以降、1146年にフセヴォロド [C41] が没して [321]、弟イーゴリ [C42] と、モノマフ一族でヴラジミル公のイジャスラフ [D112:I] とが公座をめぐる抗争を展開し、後者が勝利するまで [326] の部分を、「フセヴォロドの時代」の独立した編集単位として取り出すことができる<sup>18)</sup>。

この部分は、「モノマフ一族の時代」のように、記事の傾向が一様ではなく、チェルニゴフ、スーズダリ、ガーリチ関係の記事など多様な情報が、一無秩序に配置されているように見える。

全体としては、この部分では、キエフ公であるフセヴォロド [C41] の活動を記すものが多い。それは、軍事遠征、政略結婚、教会建設などで、それまでのキエフ公の場合と変わるところはない。ただし、そのような記事の中に、モノマフ一族出身でヴラジミル公（在位1135年～1142年）、ベレヤスラヴリ公（在位1142年～1146年）であるイジャスラフ [D112:I] にかかわる記事が混在していること特徴的である。これは、イジャスラフがこの期間ベレヤスラヴリの公座にあり、フセヴォロドのあとに軍事力によってキエフ公位に就くことと関係があるかもしれない。

---

17) 火の柱の幻視 [268]、典院フェオクチストの主教叙任 [273]、プローホルの典院叙任 [273]、ヴィシエゴロドの献堂式への典院の参加 [280]、典院プローホルの死 [290]、フェオドーシイの棺の修復 [293] など。

18) この編集単位は、先行の研究では、「フセヴォロド・オリゴヴィチ物語」(Повесть Всеволода Ольговича) と呼ばれることがある。

フセヴォロド [C41] に対する編集者の立場は、「兄弟の間の不和を煽り立て」(1140 年 [303])、「自らの力を持つ」(1140 年 [304]) としておおむね批判的に描かれ、1140 年のアンドレイ [D18] との和議ではフセヴォロドが神の奇蹟に畏れおののくエピソードが語られている [306]。また、1143 年の息子スヴァトスラフ [C411:G] の結婚式に「神を恐れぬポーランド人」を招待したことに言及し [313]、1146 年のかれのズヴェニゴロド遠征の失敗 [320] については神意をわきまえなかったことを指摘している。このように、一貫して批判的な評価がなされているが、決して直接に否定することはなく、かれがモノマフ一族諸公とよい関係を保っていることについては評価している<sup>19)</sup>。

これに対して、ペレヤスラヴリ公 (在位 1135 年 ~ 1141 年) アンドレイ [D18] に対する編集者の評価は高く、1140 年のフセヴォロド [C41] のペレヤスラヴリ遠征の記事では、一族の土地を死守しようとする理想的な公として描いており [305]、1141 年のかれの死の記事では「篤信の公」と讃辞を呈し、葬儀の時の奇蹟について触れている [309]。

これと比較すると、イジャスラフ [D112:I] に対しては肯定的な描き方はされているが、評価はほとんどなされていないか控えめである。これは、編集者がヴラジミル公時代のイジャスラフについてほとんど知らなかったことによるのではないか。

さらに、編集者はガーリチ公ウラジミルコ [A121] に対して「大口たたき」(1144 年 [315]) と呼び、イーゴリ [C42] を騙そうとし [316]、ガーリチ人に対して「残酷な処刑をする」(1144 年 [317]) 否定的な人物として描いている。これは、キエフ公に対抗する勢力であることからきているだろう。

このように見ていくと、この編集単位は、先行のモノマフ一族時代の編集と、記事の内容、資料の出所、構成等は違いが目立つものの、編集者の立場にはあまり変化がないことが分かる。つまり、モノマフ一族 (とくにアンドレイ [D18]) に近く、個人的にも強い好意を持っている人物ということになる。

1140 年の、コンスタンティノポリスに追放されたポロツクの二人の公が帰国した記事では、モノマフ [D1] やムスチスラフ [D11] の事蹟が回想されているが [303-304]、これも、上述したムスチスラフ [D11] のおそらく聴罪司祭だったアンデレ修道院のグリゴリー自身からの聞き書きが資料になっているのではないか。1145 年のヤロポルクのアンデレ修道院での改葬についての記事 [319] も、アンデレ修道院の記者もしくは編集者の手になるだろう。かれは、若い頃ヴラジミル=ヴォルィンスキイやペレヤスラヴリを転々としていてキエフに住むことはなかったイジャスラフ [D112:I] には、あまり好意を感じていなかったようである。

---

19) Толочко П. П. Русские летописи и летописцы... С. 104-105.

それに対して、1140年にヴァチエスラフ [D16] が自主的に公座をフセヴォロドに譲ってキエフを退去する理由として「流血を望まなかった」[302]としているのは、謙抑を尊ぶ、モノマフ一族時代の編集者と共通している。おそらく、「モノマフ一族の時代」の編集者(たち)が、フセヴォロド時代にも引き続き年代記の編集を行ったのではないか<sup>20)</sup>。すなわち、キエフ公フセヴォロド [C41] およびモノマフ一族諸公と従来から緊密なつながりのあった、アンドレイ修道院と洞窟修道院が編集場所ということになるだろう。

なお、キエフ公フセヴォロド [C41] は、1142年に兄弟のイーゴリ [C42] やダヴィドの二人の息子の領地要求に対処するために、従兄弟で洞窟修道院の長老だったスヴァトーシャ [C31] (1143年没) を使者としてかれらのもとに派遣している [312]。このことから見て、キエフ公時代のフセヴォロドは、洞窟修道院とは一定の関係をもっており、フセヴォロド関係の資料は、この修道院経由でもたらされたのかもしれない。

### (3) 「イジャスラフ・ムスチスラヴィチの時代」<sup>21)</sup> [1146年～1154年] [327-469]

1146年、イジャスラフ [D112:I] はペレヤスラヴリからキエフに進攻、オレーグ一族諸公軍を撃ち破って、イーゴリ [C42] を捕虜とし、8月にキエフに入城して公座を獲得する [327]。それ以降、1146年～1148年のイジャスラフ [D112:I] とチェルニゴフのオレーグ一族との戦争 [330-366] と1148年～1149年のスーズダリのユーレイ [D17] との戦争と、抗争が展開される [366-383]。ユーレイは一時キエフの公座に就くが、イジャスラフは反攻して公座を回復する (1149年～1150年 [384-398])。その後、キエフの公座は、イジャスラフとヴァチエスラフ [D16] の第一次二頭体制 (1150年 [398-403])、ユーレイの復帰と退却 (1150年 [403-417])、ルート川合戦の勝利による第二次二頭体制の確立 (1151年 [418-445]) とめまぐるしく公が交替する。

1152年にイジャスラフ [D112:I] による公座が安定したのは、イジャスラフ＝ロスチスラフ [D116:J] 陣営対ユーレイ [D17] ＝スヴァトスラフ [C43] 陣営の抗争 (1152年 [454-461])、イジャスラフの対ガーリチ対策の記事 (1152年～1153年 [461-468]) が続く。そして、1154年にイジャスラフ [D112:I] が病没するまで [469] の期間を編集単位として取り出すことができる。

この期間は時間的には10年に満たないが、記事の量はとりわけ多く、『キエフ年代記』全体のほぼ三分之一を占めている。分量が多いのは、他の編集単位の記事にくらべて、遠征、戦争、和議の描写が具体的で長いこと、ひとつの抗争について対立する当事者双方の資料を使って記

20) P・トロチコはこの人物について、「フセヴォロド大公の近くにおいて、宮廷の紛争の細部に通じていたが、オレーグ一族ではなく、ウラジーミル一族に荷担していた人物」と推定している。Толочко П. П. Русские летописи и летописцы... С. 105.

21) この部分は、研究史では、Летописец Изяслава Мстиславича という名称で論じられることが多い。

事が書かれていることによっている。もちろん、この時期はキエフの公座をめぐる状況がめまぐるしく動いていたことも関係しているだろう。

この部分は、イジャスラフ [D112:I] の治世としてまとめられるが、年代記の記事としては、次のような共通する特徴を見出すことができる。

まず、先に触れたように遠征、戦争についての記事が非常に詳しく、記述が具体的であること。この部分の主調であるイジャスラフ [D112:I] の遠征関係の記事は、当事者でなければ書けない細かなエピソードが記され、迫真性を持っている。その広がりも、スーズダリのユーリイ [D17] との交渉もあれば、ガーリチとの交渉や、弟ウラジーミル [D115] を介したハンガリーとの交渉もある。さらに、交渉で使者が口にする直接話法の口上も、とりわけ頻繁にかつ詳細に引用されている<sup>22)</sup>。また、キエフにおける叔父ヴァチスラフ [D16] との交流についても記述が詳しい。

同時に、イジャスラフに敵対する陣営であるスヴァトスラフ [C43] やユーリイ [D17] の活動も非常に詳しく描かれている。スヴァトスラフ [C43] については、研究者が一様に指摘しているように、チェルニゴフ資料<sup>23)</sup> を多く取り入れていることによるだろう。これは主に1146年～1154年の期間の記事の中に配置されており、その記事の利用は、編集者の方針によるものだろう。そしてその記事は、スヴァトスラフ・オリゴヴィチ [C43] の活動をめぐって人名、地名、日付の記載が詳細であり特徴的な文体を持っていることから、聞き書きではなく、スヴァトスラフ陣営の当事者が作成した遠征に関するメモのような文書を資料として利用したと考えられる<sup>24)</sup>。

さらに、ユーリイ [D17] とその一族の動向を記したスーズダリ資料も部分的に用いられている<sup>25)</sup>。例えば、1149年のユーリイ一族のルツクへの進軍の記事 [388-391]、1151年のドニエブ

---

22) Гимон Т. В. К вопросу о княжеских посланиях в Киевском своде (XII в.) // Восточная Европа в древности и средневековье. Политические, экономические, культурные и конфессиональные связи Восточной Европы. Внешняя политика Древней Руси. М., 2018. С. 67.

23) 研究の中では、「スヴァトスラフ・オリゴヴィチ年誌」(Святославовы записи, летопись Святослава Ольгвича) もしくは、キエフ年代記の〈チェルニゴフ資料〉(черниговские летописные фрагменты) と呼ばれている。Лихачев Д. С. Русские летописи и их культурно-историческое значение. М.; Л., 1947. С. 184-189.などを参照。

24) 例えば、コラチェフの陣営におけるスヴァトスラフの決断(1146年 [335-336])、スヴァトスラフとユーリイの会合と老臣ピョートルの死(1147年 [339-340])、スヴァトスラフ陣営へのポロヴェツ部隊の援軍(1147年 [341-342])、1149年のスヴァトスラフのダヴィド一族やユーリイとの巧みな交渉術 [374-375]、かれの行軍と息子イーゴリ [C432] の誕生(1151年 [422-423])などがこれに該当する。

25) このような記事については、この編集単位の記事の『ラヴレンチイ年代記』との対照によって、文字どおりテキストが一致している部分が見つかるが、ほとんどの場合、それはスーズダリのユーリイ一族の周辺から発した情報と見ることができる。

ル川をはさんだイジャスラフ [D112:I] とユーリイとの戦闘の描写 [423-424] はこの資料に拠っている。これらの記事におけるユーリイについての編集者の評価は両面的であり、「キリスト教徒の血を流さない」などの肯定的な言説（1149年 [380]）もあれば<sup>26)</sup>、かれを誓約違反者として否定的に描くこともある（1149年 [388-389, 394]）。

他方、ユーリイの息子アンドレイ [D173] については常に肯定的に描かれている。1149年にかれは父ユーリイ [D17] に対して「父の地を滅ぼさない」ためにウラジミルコ [A121] との和解を請願し、兄弟融和を説き [391-392]、1150年のルツク城下の戦いで神と聖テオドロスの助けを得ることができ [390-391]、1151年のルート川の戦いでは、アンドレイ [D173] が「神の加護を受けた」という肯定的な評価の文言がある [438-439]。これらの記述はイジャスラフ [D112:I] の陣営との戦いの中の描写であり、一見すると編集者の、キエフ公イジャスラフを中心として描く立場と矛盾する見える。しかし、これは編集者の立場というよりも、スーズダリ資料をそのまま使ったことによるだろう。ただし、資料の中のアンドレイへの肯定的評価を削除しなかったということには、一定の編集者の判断が働いていたかもしれない。

このように見ていくと、さまざまな出典の資料を集めて、これを有機的に組み合わせて、この時代の諸公の活動について精力的に長い物語を叙述するというのは、この編集単位の編者の方針であったことが分かる。そのような叙述の中で、全体として見ると、諸公に対する評価の文言は、肯定であれ否定であれあまり多くない。イジャスラフ [D112:I] についても、それに敵対するスヴァトスラフ [C43] やユーリイ [D17] についても、かれらの行動を評価するよりも、それを詳細に叙述することに重点を置いた編集になっている。

ただし、少ないとは言え、記事には編集者による評価的な文言が散見する。これらを検討しながら、この編集単位の編集者像を探っていこう。

まず、キエフ公イジャスラフ [D112:I] については、ロスチスラフ [D116:J] とともにルーシの地とキリスト教徒のために、和平を願う人物（1148年 [364-365]）であり、罪を悔い、年長制の掟を守る人物（1150年 [417-418]）として基本的に肯定的に描かれている。しかし、1146年のイジャスラフ [D112:I] が、十字架接吻の誓いを破ってイーゴリ [C42] 討伐の遠征を始める部分の描写 [322-323] や、キエフ人によるイーゴリ殺害を嘆く部分 [354-355] などは無理にその行動を正当化している印象がある。総じて、イジャスラフ [D112:I] への肯定的な評価は控えめであり、かれの人格や徳性を積極的に讃えることはない。かれの死亡の記事の中にも、その人格や徳についての言及を見出すことができない（1154年 [469]）。イジャスラフ [D112:I] については、ヴァチエスラフ [D16] の口から「わしに侮辱を加えた」（1151年 [429]）、「二度にわたっ

---

26) ユーリイを肯定的に描く部分 [380] は、チェルニゴフ資料に依拠しているため、資料をそのままに使ったことにより、編者の評価ではないかもしれない。

て約束を破った」(1151年 [430])と言わせているように、否定的ではないまでも、距離を置いていることがわかる。

それに対して、イジャスラフとの二頭体制を担ったヴァチエスラフ [D16] については、キリスト教の徳にあつく、兄弟融和を願う人物として描かれている(1149年 [392-393], 1151年 [430])。おそらく、編集者は、政治的には消極的だったヴァチエスラフに、同族融和とキリスト教徒保護の自らの理念を託そうとしたのだろう。

他方、否定的な人物としては、ダヴィド一族(とくにイジャスラフ [C35])が、「悪魔の手引きによって」和平と兄弟融和を乱す元凶として描かれている(1146年 [328-329], 1146年 [330, 333])。また、イジャスラフ [D112:I] に敵対していたガーリチ公ウラジミルコ [A121] も、一貫して、誓約違反者でありキリスト教の道徳をかえりみず、異族(ハンガリー人)と共謀する否定的な人物として描かれている(1150年 [416-417], 1152年 [450-451, 453-454])。そして、かれのガーリチにおける急死についての長い物語(使者ピョートルの記録)(1152年) [461-465] は傲慢の罪に対する神罰として描かれている。

以上の検討から、この編集単位について、どのような編集者像を得ることができるだろうか。これまでの編集史研究では、ルイバコフ、トロチコなどの研究者はこの部分の書き手(編集者)として、イジャスラフの側近貴族であるピョートル・ボリスラヴィチ(Петр Бориславич)の名をあげている。ルイバコフによればこの編集単位の最初の部分(1146年～1149年 [327-383])がこの重臣の手なるとし<sup>27)</sup>。さらに、1149年の記事の一部と [383-394] と1150年の長い記事の中から、イジャスラフ [D112:I] を支持する内容の記事は、ピョートル・ボリスラヴィチが書いたとしている<sup>28)</sup>。また、P・トロチコはこの編集単位の編集者について、ピョートルだけではなく、チェルニゴフやスーズダリ出身者もふくめた複数の編者を想定しており、編集方針としてはイジャスラフ [D112:I] を擁護する姿勢で一貫しているとしている<sup>29)</sup>。

しかしながら、先行研究で名前が挙げられている人物は、上述の方法的立場から見れば「資料提供者」であって「編集者」ではない。記事の中の行動や人物についての評価はこの人物のものではない。もちろん、多くの記事の内容が、ピョートルの口から語られたことは疑いない

---

27) Рыбаков Б. А. Петр Бориславич. Поиск автора "Слова о полку Игореве". М., 1991. С. 170.

28) Летописные заметки в пользу Изяслава, ведшиеся на Волыни и в походах (до 6 апреля 1151 года)

29) Толочко П. П. Русские летописи и летописцы... С. 106-110.

が<sup>30)</sup>、最終的に記事を編集した編者は別の人物であり、年長制の原理とあわせてキリスト教徒の擁護を強調していることから見て、おそらくはキエフの修道士だったろう。

多数の資料を集め、大規模な編集作業が可能な修道院としては、当然洞窟修道院が先ず候補にあがる。実際、T・ギーモンは、この編集を洞窟修道院の典院フェオドーシイ二世の活動の時代と結びつけている<sup>31)</sup>。1148年にキエフ公イジャスラフ [D112:I] はオレーグ一族諸公に対して、ベルゴロド主教フェオドールとともに、フェオドーシイ二世を自らの使者として派遣している [366]。そのような重要な使命を託されるということは、この時期、洞窟修道院はイジャスラフ [D112:I] に非常に近かったと考えられるのではないか。それゆえ、キエフ大公のもとに集まる膨大な資料が修道院に託され、遠征や使節に参加した側近たちが証言を提供するなどして、この修道院で年代記の編集作業が続けられたのではないだろうか。

#### (4) 過渡期の記事 (1154-1159年) [469-503]

1154年にイジャスラフ [D112:I] が没した後、キエフの公座は目まぐるしく主役が交替している。まず、ヴァチェスラフ [D16] からロスチスラフ [D116:J] への公座移譲があり、ロスチスラフ [D116:J] とイジャスラフ [C35] の内争を経てイジャスラフ [C35] が公座に就く。すぐにユーリイ [D17] が反攻してイジャスラフ [C35] が公座から退去する (1154年～1155年 [469-478])。ユーリイ [D17] の公位就任からその死 (1155年～1157年 [478-489]) の期間を経て、イジャスラフ [C35] の再度の公座就位、イジャスラフとオレーグ一族の同盟、ムスチスラフ [I1] の反攻、イジャスラフ [C35] のキエフからの逃亡 (1157年～1159年 [489-503])、最終的にロスチスラフ [D116:J] がキエフ公になる (1160年 [504])。その5年あまりの時期に延べ6人もの公がキエフの公座に就いている。次の安定に至るまでの過渡期の混乱の時代である。

この編集単位で比較的多く描かれているのは、キエフの公座をめぐるユーリイ [D17] とイジャスラフ [C35] の活動であるが、二人については年代記記事の評価にユレがある。ユーリイ [D17] については「人が死んでいくのを哀れむ」(1157年 [487]) という美徳に言及することもある一方で、1158年のかれの死のエピソードでは飲酒が原因であることを暗示し、死後たちまちキエフ市民の掠奪が始まった [489]、つまり市民から憎まれていたことが指摘されている。

30) 1152年のウラジミルコ急死の物語 [461-465] は、使者としてガーリチへ派遣されたピョートルから全面的な聞き書きがもとになっている。また例えば、イジャスラフ [D112:I] が側近に何度も口にした諺「地位が人を来させるのではない、人が地位のところへ行くのだ」[442]のエピソードは、側近であるピョートルからの聞き書きである可能性が強い。

31) Гимон Т. В. К вопросу о княжеских посланиях в Киевском своде... С. 67. を参照

イジャスラフ [C35] についてはスヴァトスラフ [C43] の助言を無視する (1155 年 [478], 1159 年 [499]) などの否定的評価がある一方で、ポロヴェツ人から捕虜を身請けするなどの (1154 年 [475]) 「善行」についても指摘されている。

つまり、短期間しかキエフ公座に就かず互いに対立している諸公に対して、年代記編集者ははっきりとした評価は控えているようである。

この部分には、先行する「イジャスラフ・ムスチスラヴィチの時代」と同様にスーズダリ資料が用いられている<sup>32)</sup>。これらの資料が多く採用されているのは、ユーリイのキエフ公座就位 (1155 年 ~ 1157[478-489]) とかかわりがあるかもしれない。

この編集単位の編集者像について考えてみよう。P・トロチコは、1154 年 ~ 1157 年の部分は、先行の「イジャスラフ時代」の編集者と同じだが、それ以降の記事は内容や評価がバラバラであることから、様々な記者による短い記事の寄せ集めの編集ではないかと推定している<sup>33)</sup>。また、フランチュクによれば、1157 年 ~ 1159 年の記事は、その前とは異なる記者が書いているとして、イジャスラフ [C35] に近い年代記記者を想定している<sup>34)</sup>。

しかしながら、かれらが指摘している相違は「資料提供者」による違いであり、やはり最終的な編集者と編集拠点は、「イジャスラフ・ムスチスラヴィチの時代」と同様に、洞窟修道院を想定するのが妥当ではないか。つまり、イジャスラフ時代にキエフ公と洞窟修道院の間にあった情報のパイプは、死後も弟のロスチスラフ [D116:J] に引き継がれたと考えられる。そのためだろう、ロスチスラフの行動の描写は非常に具体的で生き生きとしている (1154 年 [475] など)。その後キエフ公が交替しても資料収集、年代記編集の作業は続けられたと考えるべきではないか。

この部分には、洞窟修道院にかかわる注目すべき記事が二つある。第一は、1156 年にノヴゴロド主教ニフォントがキエフで没して、洞窟修道院に安置された物語 [483-484]、第二は、1158 年にミンスク公グレーブ [L5] の妃が洞窟修道院で没し、修道院多額の寄進をした記事 [492-493] である。二つとも比較的長く具体的で、直接の見聞にもとづいていることは明らかである。このような記事が収録されていることは、フェオドーシイ二世 (没年は 1156 年) が引き続き年代記編集の指導を行ったことの証左になるのではないか。

---

32) 例えば、1155 年にキエフ公になったユーリイ [D17] がキエフ周辺の諸城市に息子たちを配置する [478-479]、1155 年のユーリイとポロヴェツ人の和議とイジャスラフ [C35] との和議 [481]、アンドレイ [D173] のヴラジミル = ザレスキイ行き [482] とかれのスーズダリの地の支配、かれの建築事業を讚える記事 (1158 年 [490-491])、ボリス [D170] の死とロストフ主教レオンの追放 (1159 年 [493]) などがある。

33) Толочко П. П. Русские летописи и летописцы... С. 110-111.

34) Франчук. В. Ю. Киевская летопись. С. 29.

なお、この編集単位では、チェルニゴフ公のスヴァトスラフ [C43] が、1158 年にはユーリイへの謀議を断り [489]、イジャスラフ [C35] に正しい助言をする (1155 年 [478]、1159 年 [499]) など徳の高い公として肯定的に描かれている。これは、ニフォントが「スヴァトスラフ [C43] の寵愛を受けていた」(1156 年 [484]) ことから、スヴァトスラフは洞窟修道院と親しい関係を結んでいたことによって説明がつかうだろう。例えば、1159 年の項にはポロツク関係の長い記事があり、ログヴォロド [L1] の遠征の成功について記されているが [493-497]、これはログヴォロドがスヴァトスラフ [C43] の支援を受けていた関係で、洞窟修道院に情報がもたらされたと考えられる。

#### (5) 「ロスチスラフ・ムスチスラヴィチの時代」(1160 年～1168 年) [504-532]

1160 年にロスチスラフ [D116:J] がキエフの公座に就く [504] と、その後 8 年間はキエフの統治は安定する。かれが没する 1168 年 [532] までの記事は、一本の長さが少なくなり、書き継ぎ型の編年記録に近くなっている。また先行部分とは異なる編集の特徴がある<sup>35)</sup>。

初めの部分は、キエフ、スモレンスク、ノヴゴロド(ロスチスラフ一族)の関係記事があり(1160 年～1161 年 [504-511])、それ以降は、ロスチスラフ [D116:J] とイジャスラフ [C35] 及びスヴァトスラフ [C43] の抗争に関する記事が目立っている。1161 年にはイジャスラフ [C35] が一時的にキエフに入城するが [516]、1162 年にロスチスラフはムスチスラフ [I1] の援軍を得て、イジャスラフを倒す [518]。その後、ロスチスラフとムスチスラフの確執があり [519-520]、1163 年に二人は和を結んでいる [521]。興味深いのは、1164 年～1167 年の期間の記事 [522-527] は、チェルニゴフ、ガーリチ、スーズダリ、ポロツク関連の記事からなっており、キエフ関係の記事はほとんどないことである。1168 年によくロスチスラフ [D116:J] のポロヴェツ対策のキエフ記事があらわれると [528]、次は、非常に長いロスチスラフの臨終の物語 [529-532] で終わる。

この編集単位の特徴としては、なによりも教会関係や宗教的内容の記事が多いことであ

---

35) この編集単位は、先行研究では、「ロスチスラフ・ムスチスラヴィチ年代誌」(Хроника Ростислава Мстиславича) と呼ばれることもある。

る<sup>36)</sup>。この、教会的テーマへの強い関心から見て、この部分の編集者は教会人だとする見解が研究者から出されている<sup>37)</sup>。そして、ロスチスラフの臨終物語が非常に詳細で、これに立ち会った者でなければ書けないことから、洞窟修道院の修道士の手になると想定される。例えば、P・トロチコは、この物語の作者について、物語で言及されている [529, 531] ロスチスラフの聴罪司祭シメオン<sup>38)</sup> ではないか推定している。いずれにせよ、物語からわかるように、ロスチスラフは洞窟修道院典院のポリカルプと生前から親密な交流を続けてきており、ロスチスラフの時代の年代記もこの修道院で資料が集められ、ポリカルプの指導のもとに編纂されたと考えるのが自然ではないか。

#### (6) ムスチスラフ・イジャスラヴィチ, スヴァトスラフ・フセヴォロドヴィチ及びロスチスラフ一族のキエフをめぐる政争の時代 (1169 年 ~ 1178 年) [532-613]

ロスチスラフ [D116:J] による安定したキエフ統治の時代を終えると、キエフの公座は再び諸公の争奪戦の対象となり、この時代の編集単位は、諸公の遠征、戦争についての長い物語がつなぎあわされる編集に戻る。

1168 年にキエフ公ロスチスラフ [D116:J] が没すると、ムスチスラフ [I1] がキエフに入城し公座に就くが (1169 年 [534]), 1170 年にはムスチスラフ [I1] とロスチスラフ一族のリューリク [J2], ダヴィド [J3] との確執が始まる [541-543]。1171 年には、アンドレイの命令によるキエフ掠奪の物語が語られる [543-545], 次いでキエフの公座はグレーブ [D178] とムスチスラフ

---

36) 1159 年最後の前府主教クリメントの処遇をめぐるロスチスラフ [D116:J] とムスチスラフ [I1] の論争 [503-504], 1161 年の府主教フェオドールのキエフ到来 [514-515], 1162 年のスーズダリ主教レオンの追放 [520], 1163 年の府主教フェオドールの死 [522 と ]1164 年の府主教イオアンのキエフ到来 [522], 1166 年ノヴゴロド主教イリヤの叙任 [526] が該当し, 1166 年に没したヤロスラフ・ユーリエヴィチ [D176] は「敬神でキリストを愛する公」と呼ばれている [526]。また, 1168 年ロスチスラフ [D116:J] の臨終についての長い物語 [529-532] はかれ自身が修道士としての死を望んだにもかかわらずかなえられなかった顛末が記された一種の聖人物語になっている。

さらに『ヴォスクレセンスカヤ年代記』の 1159 年の項に存在し、『イパーチイ年代記』ではおそらく削除されたと考えられる「府主教コンスタンチンの死の物語」(イパーチイ年代記 (6) : 209-211 頁) も, そのような傾向の物語である。

37) Толочко П. П. Русские летописи и летописцы... С. 113-114. など。

38) このシメオンについては, 1171 年の項に「聖アンデレ修道院の典院シメオン」との言及があり [546], かれはロスチスラフ [D116:J] の聴罪司祭の「シメオン」と同一人物である可能性が高い。Толочко П. П. Русские летописи и летописцы... С. 115. もしそうであれば, ロスチスラフは, モノマフ一族に由緒のあるアンデレ修道院とも交流を保持していたことになる。

[I1]との間で再三やり取りされる。さらに「ウラジーミル [D181] の死と埋葬の物語」などロスチスラフ一族にかかわりのある「物語」が書かれている（1171～1172年 [545-551]）。

これ以降 1172年の項にはユーリイ一族にかかわる記事（スーズダリ資料）が続き「ヴラジミル＝ザレスキイにおける主教フォードル追放物語」（1172年 [551-554]）、「グレーブ [D178] とミハルコ [D175] のポロヴェツ人討伐の記事」（1172年 [554-559]、1173年 [562-563] に再掲）、1173年の項には「アンドレイの命令によるノヴゴロド遠征記事」[560-561] など長い物語が続けて載せられている。

1173年～1174年の項に再び、ロスチスラフ一族（キエフ、スモレンスク）、チェルニゴフ、ガーリチ関係の記事があらわれるが [561-572]、スーズダリ関係記事（ウラジーミルミハルコとフセヴォロドのポロヴェツ人討伐 [562-563]、グレーブ [D178] の死 [563-564]、ブルガール遠征 [565]）など）も混在している。

そして、1174年の項にはロスチスラフ一族に近い記者による「アンドレイの命令によるロスチスラフ一族討伐のキエフ大遠征とその失敗の物語」が叙述され [572-577]、つぎに、スヴァトスラフ [C411:G] によるキエフ公位篡奪 [578-579]、ヤロスラフ [I2] のキエフ公復帰と悪政、スヴァトスラフ [C411:G] の悪事の描写 [579-580] とキエフの公座の動きが述べられている。

その後、スーズダリ資料にもどり、「アンドレイ敬神公殺害の物語」（1175年 [580-595]）の大きな物語が挿入され、さらに、1175年の項にはまとまったかたちで「ムスチスラフ [D1711] とヤロポルク [D1712] のヴラジミル＝ザレスキイ統治の物語」[595-599]（スーズダリ資料）が語られる。

1176年は全体が「ミハルコとフセヴォロドのムスチスラフ [D1711] 討伐のためのヴラジミル＝ザレスキイ遠征物語」[600-603] で、1177年に入るとスヴァトスラフ [C411:G] がキエフ公ロマンを追放してキエフに入城し、ロスチスラフ一族は反攻するが、最終的にスヴァトスラフのキエフ公座就位が容認されることになる [603-605]。この年には記事に断絶があり [605]、ミハルコとフセヴォロドのコロクシャの合戦からのヴラジミルへの凱旋物語 [605-606]（スーズダリ資料）が途中から挟まれている。

1178年の記事では、ノヴゴロド公ムスチスラフ [J5] の事蹟とその死についての長い物語があり [606-612]、次いでスヴァトスラフ [C411:G] のキエフ治世についての記事があるが [612-613]、最後にチェルニゴフ、スーズダリ資料が付されている [613]。

以上年代を追って概観した記事構成から分かるように、この構成単位では、ロスチスラフ一族関係の記事、ユーリイ一族にかかわる記事、チェルニゴフ資料が混在している。先行の構成単位と比べると、ユーリイ一族に関する記事（スーズダリ資料）の比重が高くなっていることが目立っている。とくに、1175年の「アンドレイ公 [D173] 殺害の物語」[580-595] は、『ラヴレンチイ年代記』のテキストとの対照で分かるように、スーズダリ資料をもとにしてキエフの

編集者（年代記編集者と同一だろう）の手で聖人伝の方向への大幅な編集が加えられている。

この編集単位の編集者について考えるとき、洞窟修道院典院のポリカルプ（在位 1164年～1182年）の役割は重要である。

1171年のアンドレイ [D173] の命令により息子ムスチスラフ [D1731] がおこなったキエフ掠奪の物語 [543-545] は編集者を知るための手がかりになる。もとの資料に近いと考えられる『ラヴレンチイ年代記』の並行記事では、掠奪の原因について「これらのことは、かれら〔キエフ人〕の罪ゆえに、そしてなによりも府主教の不正な〔教義〕のゆえに起こった」、この「不正」ゆえに「洞窟修道院典院ポリカルプを罰していた」<sup>39)</sup>として、府主教コンスタンチン二世の教義違反への報復であることが示されている。それに対して、事態の経緯について詳細に記されている『キエフ年代記』では、「ポリカルプ」の名は削除され、「これらすべては、われらの罪ゆえに起こったのである」と原因をあいまいに表現し、洞窟修道院が「邪教徒によって火をかけられた」が「聖母の祈りによって神はこのような厄災からも修道院を守られた」 [545] とだけ述べている。

この改作は、本年代記のこの部分の編集の当事者が洞窟修道院のポリカルプ（もしくはかれに近い修道士）であることを示しているだろう。当時ポリカルプは、教会問題についてアンドレイ公 [D173] やヴラジミル＝ザレスキイ主教フョードルと近い立場にあり<sup>40)</sup>、アンドレイのキエフ奪略についての方針を支持しながら、府主教庁とも関係を保持していくために、このような「微温的」な改作を行ったのではないか。

さらに、1169年の項にはムスチスラフ [I1] とウラジーミル [D115] が、洞窟修道院のポリカルプの庵室で交渉を行ったことが関係者の名前を含め詳細に記されており [535]、1170年のヤロポルク [I3] 病没の記事では、キエフ公ムスチスラフ [I1] の使者として [539]、同年のウラジーミル・アンドレイヴィチ [D181] 死去の記事でもキエフ公グレーブ [D178] の使者として [546]、修道院典院ポリカルプの名が言及されている。また、1174年ではアンドレイ [D173] の意向によってキエフ公となったロマン [J1] をキエフで出迎える人々の中にこの洞窟修道院典院の名があらわれている [568]。このように、この時期の年代記記事に洞窟修道院についての言及が多いのも、年代記編集の拠点がここであったことの傍証になるだろう。

39) Полное собрание русских летописей. Т. 1 Лаврентьевская летопись. М., 1997. Стб. 354. 「スズダリ年代記訳・注 [IV]」『古代ロシア研究』23号, 2014年。16頁。

40) Воронин Н. Н. Андрей Боголюбский. М., 2007. С. 153.

(7) 「リューリク・ロスチスラヴィチとスヴァトスラフ・フセヴォロドヴィチの二頭体制時代」  
(1180年～1194年) [613-681]

本年代記には1179年の項に記事がなく、1180年はキエフ公スヴァトスラフ [C411:G] がオレーグ一族諸公とルーシの地支配についての約定を結んだ記事から始まっている [613]。それに続いて「キエフに大いなる悪が起こった」として大火について言及していることから [614]、年代記記者は、スヴァトスラフ [C411:G] によるキエフ支配を不吉なものとして描こうとしていることが読み手に伝わってくる。また、ベレジコフは『イパーチ年代記』において1180年の記事からこれまでの超3月暦から、3月暦法に移っているとしており<sup>41)</sup>、このようなことから1180年に編集上のなんらかの切れ目を想定することができるだろう<sup>42)</sup>。

1180年から1181年にかけて、キエフの公座をめぐるスヴァトスラフ [C411:G] とリューリク [J2] の間で争奪戦が繰り返され、1181年後半に二人は和を結んで [624-625]、スヴァトスラフ [C411:G] はキエフに、リューリク [J2] はベルゴロドに公座を置いて、実質的にキエフはこの二人によって支配されるようになった。そして、1194年にスヴァトスラフ [C411:G] が死亡し、リューリク [J2] がキエフの公座に就く [681] までの期間を、年代記においても編集単位として取り出すことができる。

この部分の記事は、基本的にスヴァトスラフ [C411:G] に焦点をあてたものと、リューリク [J2] にあてたものと大きく二つに分けることができる。そして、この二つは異なった出典から資料を得ていると考えられる。これに先行の編集単位と同じく、スーズダリ資料、チェルニゴフ資料、ガーリチ資料が組み合わされて、複雑な構成になっている。

この部分の記事の特徴は、キエフ公とチェルニゴフ公による、対ポロヴェツ遠征についての記事が目立っていることである。とくに、1183年の記事は大部分がスヴァトスラフ [C411:G]、リューリク [J2] の連合軍及びイーゴリ [C432] のポロヴェツ討伐遠征関係記事が占めている [628-633]。続く1184年～1185年も、コンチャクの来襲とホロリ川の戦いの勝利、イーゴリ [C432] の動静、スヴァトスラフ [C411:G] の対外政策と対内政策の記事がほとんどであり、次に、1185年の「イーゴリ・スヴァトスラヴィチの遠征の物語」 [637-644]、「コンチャク、グザの反撃」 [644-649]、「イーゴリの帰還」 [649-651] の大きな記事が置かれている。そして、これらの対ポ

41) Бережков Н. Г. Хронология русского летописания. М., 1963. С. 23.

42) ルィバコフは、この部分を「スヴァトスラフ・フセヴォロドヴィチ集成」(Летописный свод Святослава Всеволодовича)として論じている。Рыбаков Б.А. Русские летописцы и автор «Слова о полку Игореве». М., 1972. С. 174-176.

ロヴェツ関係の記事は、スヴァトスラフ側の資料を用いて編纂されたものと考えられる<sup>43)</sup>。

1190 年の記事も、スヴァトスラフ [C411:G] の対ポロヴェツ政策 [668-669]、リューリク [J2] の対ポロヴェツ政策 [669-672]、再びスヴァトスラフの対策 [672-673] が述べられ、1191 年にはイーゴリ [C432] の遠征が [673-674]、1192 年にはおもにリューリク [J2] の遠征が [673-674] (記事の末尾にスーズダリ資料が挿入されている)、1193 年はスヴァトスラフとリューリクの息子ロスチスラフ [J21] の遠征が取りあげられている [675-679]。

この部分の編集がどこで行われたのだろうか。1182 年に洞窟修道院典院ポリカルプの死亡と後任の典院ヴァシーリイ選出の詳しい物語 [626-628] が収録されていることから、この頃までは、洞窟修道院に年代記編集の拠点が引き続き存在したと考えてよいだろう。しかしその後は、1196 年のキエフでの地震の時の典院ヴァシーリイの予言的な言葉が引用されるまで 14 年もの間、年代記には洞窟修道院についての言及はない。

このことと、1183 年～1193 年の記事の大多数が対ポロヴェツ関係であり、それ以前の編集単位と内容や傾向がやや異なっていることを考慮に入れると、1183 年頃から年代記の編集拠点が洞窟修道院から別の場所(おそらくヴィドピチの聖ミハイル修道院)へと暫時移行していったという事態が想定できる。とくに、1190 年の項にベルゴロド主教に昇任したミハイル修道院典院のアドリアンについての言及があり、かれはリューリク [J2] の聴罪司祭だったと記されている [666] ことがその傍証となる。P・トロチコは、このアドリアンをこの部分のおもにリューリク関係記事の資料提供者さらには記者ではなかったかと推定しているが<sup>44)</sup>、確かに、1183 年～1190 年までの期間の記事は、部分的にリューリクからアドリアンに提供された資料が編集に用いられたと考えることができるだろう<sup>45)</sup>。全体としては、洞窟修道院とミハイル修道院で協力的に並行して年代記編集が行われたという事態が想定できるかもしれない。

## (8) リューリクの時代 (1195 年～1199 年) [681-715]

1194 年にスヴァトスラフ [C411:G] が死去し、リューリク [J2] がキエフの公座に就くと [681]、

---

43) P・トロチコは物語の3つの部分とも、スヴァトスラフ [C411:G] に好意的な年代記記者の手になるものとしている。Толочко П. П. Русские летописи и летописцы... С. 136 – 137.

44) Толочко П. П. Русские летописи и летописцы... С. 129. を参照。

45) 1112 年の洞窟修道院典院フェオクティストがダヴィド公の妃の聴罪司祭だったように [274]、有力な修道院の典院が公の聴罪司祭を兼ねる慣習があったことは確認でき、公族の情報を入手する主なルートだったと推定できる。

キエフ支配の二重権力は解消し、リューリクによる支配の時代になる。キエフの公座をめぐっては、ロマン [I11] がこれを狙って遠征を行い (1195 年 [681-688]), チェルニゴフ公ヤロスラフ [C412], ヴラジミール=ザレスキイ公フセヴォロド [D177:K] もこれに介入して紛争となるが (1195 年～1196 年 [688-702]), 年代記では 1199 年まで、リューリク側に立った一様な記事が載せられている<sup>46)</sup>。そして、1197 年以降は、スモレンスク公ダヴィドの死、リューリクの建設事業 [702-707], 「ヴィドピチのミハイル修道院石壁建設の物語」 (1198 年～1199 年 [709-712]), ミハイル修道院典院モイセイのリューリクに対する讃詞 [712-715] と、内争についての記事は書かれなくなる。

この最後の編集単位はどこで成立したのか。上述のように 1198 年以降の記事 [708-715] にはヴィドピチの聖ミハイル修道院の関係した記述が多く、最後がこの修道院の典院モイセイの言葉 (讃詞) で締めくくられていることから、なによりもこの修道院で編集がなされたという想定が可能にない。

しかしながら、この部分の年代記記事を検討すると、記者は必ずしもリューリク [J2] を理想化しているわけではない。ルーシの地の分け前を求めるフセヴォロド [D177:K] との紛争では、府主教ニキーフォルの口からリューリク [J2] に対して「あなたは年長の者に対する過ちを犯した」 [684] と言わせている。また、1195 年のロマン [I11] との交渉のエピソードでは [685-688], 一族の中の年長序列を尊重し [686], キリスト教徒の流血を避けようとする [688] 人物として描かれている。さらに、1196 年の記事では、リューリク [J2] とは関わりなく、フセヴォロド [D177:K], スモレンスク公ダヴィド [J3], チェルニゴフ公ヤロスラフ [C12] が和を結んだことについて「キリストは悪魔をも原野のポロヴェツをも喜ばせようとはしなかった。もし流血の事態になったら、ルーシ諸公の諍いを喜んだに違いない」 [700] と三人の公の行為を評価している。つまり、年代記の記者の中には、リューリク [J2] への特別な好意は持たず、どちらかという諸公の融和をより評価している者もいることになる。おそらく、この個所は、1195 年のキエフでの地震に際して、洞窟修道院ヴァシーライのルーシの地の罪を警告する言葉「血が流されたり、騒乱が起こる前触れ」 [690] の言葉に対応しており、そのような騒乱が実際起こったが、諸公の融和によって罪からまぬかれたと言っているのではないか。つまり、この部分にも従来の洞窟修道院における編集者が関与しているのではないだろうか。

さて、それぞれの編集単位における編集方法、編集者についての以上の検討をふまえて、最後に『キエフ年代記』が最終的にどのようにして取りまとめられて、現在の形になり、その最

46) トロチコによると、調子は前とははっきりと変わって、全面的なリューリク支持になる。(2003:140)

終編集者は誰であったかについて考えてみたい。

『キエフ年代記』の記事は1198年で終わっており<sup>47)</sup>、『イパーチイ年代記』における次の記事は、1201年の年記のもとに「大いなる公ロマン [I11], 全ルーシの地の専制君主であったガーリチ公の治世の始まり」[715]との表題が付されたガーリチの地についての性格の異なる記事が続いている。編集がここで大きく切れていることは明白である。

研究史を見ると、ほとんどの研究者が、イヴァイロフスキイが唱えた、ヴィドビチのミハイル修道院の典院モイセイ (Мойсей) を最終編集者としてあげている<sup>48)</sup>。また編集の完成年については、研究者によって1198年から1200年までの幅はあるものの本質的な違いはない<sup>49)</sup>。

しかし、年代記記事を検討するにせよ、モイセイの年代記にかかわる役割は、聖ミハイル修道院の石壁の定礎式についての記事<sup>50)</sup>と、献堂式の際のリューリク [J2] への讃詞だけであり、テキストの中にかれが年代記に携わったことを示すものはなにもない。かえって讃詞から読み取れるリューリクについての評価は神学的、終末論的であり、『キエフ年代記』全体で編集者たちが表明している、伝統的な支配原理である年長制の保持とキリスト教徒の流血の回避という現実的な立場(後述)とは大きく異なっている。この記事と言葉だけをもって、モイセイを『キエフ年代記』全体の総編集者とするには無理があるように思える。

末尾におかれた聖ミハイル修道院石壁建設関係記事 [708-715] はかなり後代に挿入された可能性もあり<sup>51)</sup>、モイセイの年代記編集における役割については、年代記全体の編集の歴史を通して検討した上で考えられなければならない。

### 3. 『キエフ年代記』の編集過程について

これまでの検討のひとまずの結論として『キエフ年代記』編集の過程について、その編集者像に焦点を当てて概観してみたい。

---

47) イパーチイ写本の年紀によれば、1199年と1200年があるが、ここではフレーブニコフ写本の年紀に従っておく。

48) Рыбаков Б.А. Русские летописцы и автор «Слова о полку Игореве»... С. 60-71. を参照。

49) А・Троичкоは1212年以降に成立したという異説を唱えている。Толочко А. П. О времени создания Киевского свода «1200 г.» // Ruthenica 5. 2006.

50) この定礎式についての長い記事 [709-710] は、モイセイが記したということは記事の中にはないが、少なくとも、聖ミハイル修道院の修道士の手になるものであろう。

51) 聖ミハイル修道院献堂式の記事で、リューリクが「ヴァシーリイ 猊下」(кюр Василий) と修道士的な尊称で呼ばれているのは、これまでの年代記記述の上では異例であり、1204年以降にリューリクがキエフで修道生活を強いられた事態を繁栄している可能性がある。

『キエフ年代記』は、約100年、世代にして3世代にわたる長い期間のルーシでの出来事の記録であり、何人もの編集者がかかわった、複雑な構成と内容をもつ集成年代記であるが、編集者たちの年代記編集のモチーフ（動機付け）とイデオロギーは、全編にわたってほぼ共通していることをまず指摘しておきたい。

これまでの検討から推定できることは、『キエフ年代記』の編集者たちのモチーフは、キエフの公支配にかかわる事実を詳しく書き留め、その正当性や安定性についてのあるべき姿を示すこと、ルーシ諸公（いわゆる рюриковичи）の活動の拡大と繁栄の姿を示すことにあったと考えられる<sup>52)</sup>。編集者たちの関心は、なによりもキエフの公座の推移であり、ルーシの地の拡大のための諸公の活動にあったのだから。その意味では、『原初年代記』の冒頭で宣言されている、「どこからルーシの地が到来して、誰がキエフにおいて最初に公として支配を始めたか、そして、どこからルーシの地が成立したか」を叙述するというモチーフを、「ルーシの地を定める活動」「キエフにおける公支配」を記録するという点において『キエフ年代記』は継承していると言えるだろう。

そのモチーフを支えるかれらの共通のイデオロギーは、ルーシの地の支配はキエフ公を中心に諸公がまとまらなければならない、ルーシの地の一体性を保持しなければならないということにある。そして、現実に頻発する公族間での紛争(内争)を解決するために、①父祖の支配の継続、「父祖と父の地」を保持すること、②父祖が守ってきた伝統的な支配原理としての年長制を尊重すること。③キリスト教の徳をもって同族（公族）、兄弟は融和すべきこと。④内争による戦争を回避して「キリスト教徒の血を流さない」という立場が、全編にわたって表明されている。

このように整理すると、『キエフ年代記』は基本的には同じ場所で編集作業が行われ、これにかかわる編集者たちは、以上のようなモチーフとイデオロギーを共有し、世代を継いでこれを伝えてきた考えるのが合理的ではないだろうか。そして、その編集拠点の候補は、キエフの洞窟修道院であり、各時代の典院の指導のもとに修道士（学僧）たちが年代記編集を組織的に行っていたと考えられるだろう。

ただし、これまでの検討で分かるように、この修道院だけで安定した年代記編集が期間をとおして続けられてきたわけではない。現実には、キエフのアンデレ修道院、ヴィドピチの聖ミハイル修道院などの別の修道院（修道士）が、情報や文書資料の提供など、時代や環境によって、年代記制作への関与があったに違いない。

52) 年代記そのものの中には、年代記編纂のモチーフについての直接的な言説を見出すことはできないが、権威ある文字記録として書き残すことによって、諸公や教会人（ルーシの地への帰属意識、同意識を共有する者たち）にとって将来の範とするということではなかったか。Гимон Т. В. Для чего писались русские летописи? // Журнал ФИПП. М., 1998. С. 16などを参照。

これを整理して述べるなら、モノマフ一族の時代(1118年～1140)には、アンデレ修道院が、モノマフ一族のキエフ公たちと近く、聴罪司祭をつとめていたその典院や修道司祭たちを通じて、基本的な資料が集められたのだろう。ただし、アンデレ修道院は規模の上では洞窟修道院や聖ミハイル修道院に比べて小規模なこと、1130年の項には、ロストフの千人長の寄進による洞窟修道院における聖フオドーシイの棺の修復[293]についての「身内」の記事があることから判断して、アンデレ修道院と協力しながら洞窟修道院でも年代記編纂が行われていたことが推定される。

フセヴォロドの時代(1141年～1146年)もかれの同族のスヴァトーシャが洞窟修道院の長老として尊敬されており、フセヴォロドの宮廷も洞窟修道院に資料を提供していたのではないか。

イジャスラフの時代(1146年～1154年)には、かれと洞窟修道院の関係はいっそう緊密になり、イジャスラフ自身も典院フェオドーシイ二世(在位1142年～1156年)と協力関係を保っていた。この時期の遠征、交渉などについての膨大な情報は、イジャスラフの側近(例えばピョートル・ボリスラヴィチ)から洞窟修道院へもたらされたと考えられることができる。過渡期の時代(1154年～1159年)も洞窟修道院における編纂作業はかわらず、ロスチラフ時代(1160年～1168年)にはより関係が緊密になる。ロスチスラフ公自身も大斎の時期には洞窟修道院で過ごすことを習慣としており、その死に臨んで自ら洞窟修道院の修士になろうとしたほどだった。洞窟修道院典院ポリカルプ(在位1164年～1182年)は、キエフ公の活動に積極的に協力しており、その後の内争の時代(1169年～1178年)にも、1170年にはムスチスラフ[I1]の、1171年にはグレーブ[D178]の使者を自らつとめるなど、修道院に資料をもたらず役割を果たしていた。

洞窟修道院での年代記編集作業は、オレーグ一族出身のスヴァトスラフ[C411:G]がキエフの公座に就いても(1181年～1194年)、典院ヴァシーリイ(在位1182年～1203年)の指導のもとで続けられた。ただし、ベルゴロドに公座を置いていたリュウリク[J2]は、ヴィドピチの聖ミハイル修道院の典院アドリアン(1190年まで在位)および典院モイセイ(在位1190年～1205年頃)と緊密な関係にあり、リュウリク関係の年代記資料はこの修道院で予備的に編集されていた可能性がある。いずれにせよ、この時期は、二つの修道院の間で写本のやり取りがなされていたのではないか。

そして、スヴァトスラフが没して1195年にリュウリクがキエフの公座についてから、1198年までの間は、基本的に洞窟修道院典院ヴァシーリイのもとで年代記編纂が行われていたが、聖ミハイル修道院との協力関係もあった考えられるだろう。1199年以降の記事は明らかに聖ミハイル修道院から資料を得ているが、これはミハイル修道院に年代記編纂の拠点が移ったというよりも、後代の記事の挿入を疑ってみるべきではないか。

